

ギヤスケル論集

第 29 号

山脇百合子先生 追悼号

2019

日本ギヤスケル協会

故
山脇
百合子
実践女子
大学
教授



山脇百合子先生 《略歴》

- 1918年 6月5日 横山壽篤（出版社キンノツノ社社長）、少女小説家、横山美智子の長女として東京で誕生。（次女は洋画家の横山てるひ、三女はニューヨークに拠点を置いて活動したバレリーナの横山はるひ）
- 1936年 3月 女子学院卒業
- 1940年 3月 東京女子大学英文科卒業
- 1942年 3月 早稲田大学文学部英文学科卒業
- 1943年 3月 早稲田大学文学部大学院（一年間研究）
- 1944年 4月 啓明学園女学校教師（英語担当）
- 1944年 10月～1947年 4月
朝日新聞東京支社勤務
- 1952年 7月～1953年 10月
英国リヴァプール大学留学（英国文化振興会奨学金）
- 1954年 4月 東京女子大学講師
- 1957年 4月 東京女子美術大学講師
- 1958年 4月 実践女子学園短期大学講師
- 1960年 4月 実践女子学園短期大学助教授
- 1966年 4月 実践女子大学教授
- 1974年 『エリザベス・ギヤスケル研究』で文学博士（大正大学）
- 1988年 10月 日本ギヤスケル協会創立、初代会長に就任
- 1989年 3月 実践女子大学定年退職。実践女子大学名誉教授
- 2006年 3月 日本ギヤスケル協会会長退任
- 2019年 1月31日 逝去。享年 101（満 100 歳）

《主な業績》

- 著書** 『エリザベス・ギヤスケル研究』北星堂書店、1976年
『英国女流作家論』北星堂書店、1978年
『形而上詩人ジョン・ダン——ルネッサンスに生きた現代人』近代文藝社、
1994年
- 監修** 『ギヤスケル文学に見る愛の諸相』北星堂書店、2002年
- 翻訳** アーサー・ポラード『風景のブロンテ姉妹』南雲堂、1996年
『ギヤスケル全集7 シャーロット・ブロンテの生涯』日本ギヤスケル協
会監修、大阪教育図書、2005年

追記

本稿作成にあたり、実践女子大学香雪記念資料館事務室のご協力を頂きました。
感謝申し上げます。

(日本ギヤスケル協会第3代会長 多比羅真理子)

目 次

追悼 山脇百合子先生

若き日の山脇百合子先生	鈴江 璋子	1
山脇先生との出会い	多比羅 眞理子	3
山脇百合子先生を悼む	鈴木 美津子	5
山脇百合子先生を偲んで	木村 晶子	7
See You in the Next World, Professor Yamawaki!	大野 龍浩	9

講演

『北と南』——『シャーリー』の再構築	白井 義昭	11
-----------------------------	-------------	----

論文

“Making Money out of the Dead”: Financial Aspects of <i>The Life of Charlotte Brontë</i>	Arisa NAKAGOE.....	25
ギヤスケルとアン・サッカレー・リッチー	矢次 綾	41

書評

Fariha Shaikh, <i>Nineteenth-Century Settler Emigration in British Literature and Art</i>	加藤 匠	53
Margriet Schippers, <i>Elizabeth Gaskell, Citizen of the World: Civic Lessons</i>	太田 裕子	59
編集後記		66

若き日の山脇百合子先生

鈴江 璋子

立春の朝、電話が鳴った。山脇先生の訃報を多比羅先生が伝えてくださったのだ。1月31日、退院後3日目、ご自宅でのことで、お見送りもご家族だけでなさるよし。もう一度お顔を見たいのだけれど「わたしたち、どうしましょう。」昨秋は令息山脇智夫画伯の個展がなかったので、気になってはいたのだ。山脇百合子先生（1918-2019）は日本ギヤスケル協会の設立者として、また実践女子大学英文学科初の女性教授として、激動の100年を生き抜かれた。「100歳。ご立派よね」「ええ、でも寂しい。」そう、生きていていただきたかった。協会設立30周年を見届けてくださったのだから、立派な、見事なご生涯なのだが。

山脇先生は小説家横山美智子の長女として生まれ、次女で画家のてるひさん、三女でバレリーナのはるひさんとともに、名門の美人三姉妹として女性誌のグラビアを飾る存在だった。私は1968年に龍谷大学助教授から実践女子大に転じて以来のお付き合いなのだが、山脇教授は優雅で美しく、英文学科のプリマとして、いつでも、にこやかに立ち上がる用意ができていらっしやった。

先生は筆が速かった。興が乗ると原稿用紙30枚くらいは一晩で書き上げられた。これはおそらく新聞記者時代の修練によるものだろう。先生は早稲田大学を卒業後、朝日新聞社に記者として入社された（1944-47）。折しも第二次世界大戦・太平洋戦争が終局に至る段階で、朝日新聞社ベルリン支局の山脇亀夫特派員からは、激烈なヨーロッパ情勢が刻々と伝えられる。暗号で送られるその送信を受け、暗号を解いて日本語の記事に仕上げるのが、横山百合子記者の仕事だった。百合子記者は電文を読み、こういう記事を書くのはどういう人だろう、と思うようになった。「煩さがられるほど質問して、一生懸命追いかけたのよ。」この聡明な受け手に対して、送り手の思いも募る。抑留の後、アメリカ経由で、ついに山脇亀夫氏（1912-92）は帰国した。英国文化振興会資金によるリヴァプール大学大学院留学（1952-53）が実現した時、もう二人は結婚され、お子様も二人おありだったので、百合子先生は留学中も日本に置いたご家族を思って「気が気ではなか

った。」

山脇亀夫氏は西欧のマナーが身についた素敵な紳士である。山脇東洋のご子孫と伺っている。「背広やネクタイは自分で選んで、私には選ばせないの」とのことで、逆に亀夫氏お気に入りのテイラーが百合子先生を見て「寸法など全然計らずに、見ただけでこれを作ってくれたのよ」と、白地にピンクのストライプのすっきりした夏ジャケットを、大切にいらっしやった。亀夫氏はずっと朝日新聞社の要職に在ったので交際も広く、智夫画伯の個展に常陸宮華子妃殿下をお招きになったこともあった。愛犬のプービエール・デ・フランドールにかかわるお付き合いだった。渋谷区大山町のお宅には、和田英作画伯による横山美智子さんの美しい肖像画と、大きな、見事な市松人形が置かれていた。

リヴァプールから帰国後、しばらくは模索されたが、実践女子学園短期大学助教授に採用された(1960)後は順調に、実践女子大学教授(1966)へと昇進されている。理事長から「女子大生に合うように、女流作家のことを教えてほしい」と依頼されて少々困り「プロンテでは実践の学生には強すぎる。ギヤスケルがいいだろう」と判断されたと伺った。学部の「女流作家論」、大学院の「作品研究」は博士論文『エリザベス・ギヤスケル研究』(1974)へと結実した。山脇先生定年(1989)後のお仕事として、実践女子大は日本ギヤスケル協会の設立と運営に助力と後援を惜しまなかった。愛弟子たちは会員・学生会員として重要な役割を果たした。山脇先生は社会に出る女性たちのパイオニアとして、芯の強い活動を続けられたのだった。

追記

本稿作成にあたっては、山脇智夫氏および実践女子大学香雪記念資料館事務室部長のご助力をいただいたことを記して御礼申し上げます。

(日本ギヤスケル協会第2代会長、実践女子大学名誉教授)

山脇先生との出会い

多比羅 眞理子

私が山脇先生と初めてお目にかかったのは52年前の大学一年生の時だった。大学生活を謳歌する日々が半年ほどたち、級友から「山脇先生の『女流作家論』が面白いわよ」と聞いた。私は登録していなかったが、級友の言葉にひかれてその授業を聞いてみたくなった。「女流作家論」という科目名が大人の雰囲気を漂わせていたからかもしれない。早速授業の前、講師室の山脇先生をお訪ねした。そして学期途中なので、単位を頂けなくともよいので、聴講させていただきたいとお願いをした。すると快くお許し下さり、テキストをくださった。簡易印刷で綴じられ、英語で書かれたテキストでアフラ・ベーンから始まる女性作家の歴史と作品からの抜粋が書かれていた。授業はシャーロット・ブロンテの項に入っているとのことだった。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』を英語で読みたくて英文学科へ進学した私は、何かの運命に導かれるように山脇先生の授業に参加させていただくことになった。授業ではシャーロットの生涯、作品について講読するものだったが、聴講生にも関わらず一番前の席に座り、先生の授業に魅せられていた。

授業での先生のお声は小さかった。しかし、先生のたたずまい、常に背をぴんとされて講義をされる姿勢、また、なんといってもおしゃれでいらした。イヤリングにネックレス、そして指輪をされ、スーツをお召しになって上品この上ないご様子に大人の美しさを感じ、理想の女性像として私の心の中に秘かに存在するようになっていった。

その頃、イギリスのロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが来日し、若きジュディ・デンチを中心に『十二夜』をはじめとしてシェイクスピアの有名な演目を上演した。大学からも積極的に観劇するように勧められ、私たち学生は今のようには字幕もなく、英語を聞き取れないままにイギリスの雰囲気劇場で味わっていた。休憩時間となり観客に河内桃子さんをはじめとする民芸の俳優さん、外国人の観客が前の方にいることに私たちが気付いた時、スーと山脇先生が素敵な紳

士（ご主人）と共に会場脇の階段を下りていらっしやって、河内桃子さんや外国の方たちと親しげに歓談を始められる姿を拝見して、文化人としての山脇先生の存在を実感したことがあり、また、誇らしく思ったことがあった。

四年生になり、必修の科目ではエミリ・ブロンテの『嵐が丘』を先生と一緒に講読させていただいた。その夏も過ぎ、進路を決める時期が来たとき先生から「もう進路は決まりましたか、もし、よければもう少し勉強したらどうかしら」とお声をかけていただいた。当時は大学を卒業したら就職するのが一般的で、卒業すると同時に結婚することもあった時代、大学院に進学する人は少なかった。私自身、大学院に進学する意味を考えずに、山脇先生からお声がかかったという嬉しさに英文学の道に進むことに決めてしまった。ここからが真の意味で山脇先生との長いお付き合いの始まりだった。

先生の「勉強する」という言葉はそれから50年近いお付き合いの間、二人でお目にかかると必ず会話に出てくるキーワードとなっていたことが今思い出される。大学院時代、そして、ギヤスケル協会で山脇先生が会長で私が事務局長をさせていただいた時、先生は常に、私の前を歩いていらっしやった。有形無形の形で様々なことをお教えいただいた。出版の打ち合わせに大阪や、芦屋へ泊りがけでご一緒したり、お食事をしたりと私の時間は常に山脇先生と共にあった。先生はまず私に家庭人として生きる大切さを常に語られた。そのあとで必ず「今、何を勉強していますか」と尋ねられた。私は授業のこと、ギヤスケルのことをお話しすると、まず黙って私の発言に耳を傾けられ、そののち先生の見解を述べられた。そして最後に「いつ読んでも、ギヤスケルは素晴らしい作家だと実感しますね」という言葉で終わられるだった。私にとって、こうした時間は何にも代えがたい貴重な時間だった。その時間を再び持つことができない寂しさを実感する日々である。

（日本ギヤスケル協会第3代会長）

山脇百合子先生を悼む

鈴木 美津子

実際に山脇百合子先生ご本人にお目にかかるずいぶん前に、先生のお書きなつたご本を熟読玩味し、私淑していた。山脇先生は1970年代後半に立て続けに3冊ご著書を刊行なさった。『エリザベス・ギヤスケル研究』（北星堂書店、1976）、『英国女流作家論』（北星堂書店、1978）、そして『ブロンテ姉妹』（新潮社、1978）である。『エリザベス・ギヤスケル研究』は、本邦初のギヤスケルに関する実に画期的な研究書である。この当時、ギヤスケルの長編小説の翻訳で容易に手に入るものは、筑摩書房の『世界文学全集14：オースティン・ギヤスケル』（1967）に収録されていた小池滋先生がお訳しになった『女だけの町』（1967）のみであった。ブロンテ姉妹やジェイン・オースティンに比較すると、ギヤスケルの小説が一般にはあまり馴染みがなかった時代に、ギヤスケルの主要作品を取り上げ、縦横無尽に論じられた先生のご著書は実に先駆的であった。これ以降、ギヤスケルを論じる際の基本的な文献となったのは言うまでもない。先生のお母様で画家の横山美智子氏に捧げられた『英国女流作家論』は、「あとがき」によると『実践女子大学紀要』、『実践文学』に長年にわたって発表されたご論考をお纏めになったものだとのこと。フェミニズムがそれほど浸透していなかった時代に、アラ・ベーン、オースティン、ブロンテ姉妹、アイヴィ・コンプトン＝バーネットなどの女性作家を仔細に分析した本書は、この上なく清新で、示唆的で、刺激的であった。

『エリザベス・ギヤスケル研究』も『英国女流作家論』もどちらも表紙は薄紫というか藤色一色で背表紙に金文字で表題が印刷されていて、とても品の良い装丁であった。講座イギリス文学作品論の第4巻として刊行された『ブロンテ姉妹』の表紙は、シリーズ共通の緑色と白で統一されていて、残念ながら先生のお人柄や個性をうかがい知る手掛かりになるものは皆無であった。『源氏物語』を想起させる薄紫色と金色の装丁を眺めながら、山脇先生はさぞかし氣品に満ちたあでやかな方なのだろうと想像を逞しくした。

山脇先生に初めてお会いしたのは、1989年10月15日、実践女子大学日野キャンパスで開催された日本ギヤスケル協会の第1回大会においてである。ついに山脇先生にお目にかかる機会がやってきたと、勇んで大会に出席した。大会会場で、遠くから拝見しただけなのであるが、年齢を超越した若々しい雰囲気、その場がぱっと明るくなるようなお姿が印象的だった。このとき、先生は71歳でいらしたのだと思うと、しなやかで強靱な知性、力みなぎる行動力に圧倒される。

いつの大会の時だったか、当時副会長を務めておられた中岡洋先生がご挨拶をなさった折りに、少年のようにはにかみながら、早稲田の学生時代に先輩であった山脇先生を「優しくてお美しいお姉様」として慕っておられたというお話をなさった。山脇先生が中岡先生の学生時代のマドンナだったという微笑ましい告白に、私はさもありなんと深く頷いた。

山脇先生を最後にお見かけしたのは、ご息子が介助される車椅子に乗って大会会場にお見えになった時である。ご息のお母様に対するお優しいお心遣いを拝見して、先生はご研究、教育、大学業務とご多忙の中、とてもお幸せなご家庭を築いてこられたのだなと思ひ至り、まさしく日本のギヤスケル夫人でいらっしゃる、と思ったことを記憶している。

60代にご著書を3冊上梓なさり、70代で学会を創設され、80代半ばまで会長をお務めになり、100歳で逝かれた山脇先生のまことに見事な充実した生涯に感嘆の念を禁じ得ない。

山脇百合子先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(日本ギヤスケル協会第4代会長、東北大学名誉教授)

山脇百合子先生を偲んで

木村 晶子

ご逝去のお知らせを受けてからかなりの時が経ちましたが、改めて山脇百合子先生の存在の大きさを痛感しています。日本の社会が激しく変化した時代に、先生が常に女性研究者としてパイオニアでいらしたこと、限らない情熱によって国内のギヤスケル研究の礎を築き、発展させたことに尊敬の念が深まるばかりです。

初めて山脇先生とお会いしたのはもう40年あまり前の私の大学時代のことで、先生が非常勤講師として「イギリス小説」のご講義をなさっていた早稲田大学第一文学部の教室でした。女性作家を中心にした授業で、アフラ・ベーンから始まってオースティン、ブロンテ姉妹、エリオット、マンスフィールドなどの紹介と作品の概要が語られ、確かウルフが最後でした。なかでもギヤスケル（当時はまだギヤスケル夫人という呼称でした）については、とても熱心にお話をなさり、私がギヤスケルの名を初めて知ったのもこの時でした。先生は、ご本務校の実践女子大学で「英国女流作家論」という講義を担当することになって女性作家研究に目覚めたと、『エリザベス・ギヤスケル研究』（北星堂書店、1976）のあとがきに書いていらっしゃると思います。ご著書の『英国女流作家論』（北星堂書店、1978）は、まだ日本の英文学界にフェミニズム批評が存在しなかった時代の出版だったことを思うと、ご研究の意義の深さがよくわかります。

当時は学生運動の最後の頃で、早稲田では校門に機動隊や装甲車が常駐し、構内では流血事件もあるという殺伐とした雰囲気でした。そんな中で、山脇先生のあの優しく上品な語り口のご講義によって、遙か彼方の空間と時間の文学への憧れを強くしたのを思い出します。扉を開けて、秘密の花園の存在を知らせてくださったような気がしました。この講義によってウルフを集中して読むようになり、大学院時代の研究につながりました。ところがその後は、博士課程に進学しながらも家事や育児に追われ、研究を細々と続けているというより、辞めてはいるという状態でしかありませんでした。そんな時期にたまたま読み始めたギヤスケルの作品について書いた紀要論文に鈴江璋子先生が目をとめて下さり、ギヤ

スケル協会に入会を勧めて下さったのが、長く続く協会とのご縁の始まりとなりました。

初期の日本ギヤスケル協会は、小池滋先生が副会長で、実践女子大学の山脇先生の教え子の方たちも多く、山脇先生の学識と人望ゆえに集まった学会という、和やかな雰囲気のものでした。年齢のことを言うべきではないかもしれませんが、今回の訃報を受けて、協会創成期からすでに山脇先生が70代でいらしたことを知り、驚きを禁じ得ませんでした。多人数の学部の授業では山脇先生とお話しする機会もありませんでしたが、協会ではいつも親しくお声をかけてくださいました。20年ほど前に私が英国のギヤスケル協会に参加したときにもいろいろお話できましたが、先生はゆったりと穏やかでありながらも澁刺として、才気あふれるご様子でした。

残念ながら先生は令和時代を見ずに旅立たれましたが、志渡岡理恵先生のご尽力によって、今秋の大会を実践女子大学で開催させていただけることとなり、それが少しでも先生の追悼になればと思います。学問的なことばかりではなく、山脇先生には常に精神のみずみずしさを失わないことの大切さを教えていただきました。感謝と共に、心からご冥福をお祈りいたします。

(日本ギヤスケル協会第5代会長、早稲田大学教授)

See You in the Next World, Professor Yamawaki!

大野 龍浩

それはもうすぐ学部3年生を終える春休み頃だったか。卒業論文のテーマを決めるために、福岡市天神にある紀伊國屋書店の英文学書コーナーで立ち読みをしていた時、山脇百合子先生の『ギヤスケル研究』（北星堂書店、1976）と『英国女流作家論』（北星堂書店、1978）がふと目に留まった。平明な文章で書かれた作家の生涯や代表作のあらすじを読みながら、興味を覚え、買い求めた。なかでも、とくに心惹かれたのは *Sylvia's Lovers* だった。

1980年代当初、エリザベス・ギヤスケルは無名に近かった。テキストも Oxford World's Classics 版や Penguin 版などなく、Dent 版をようやく手に入れた。専門書も日本語によるものは山脇先生の一冊のみで、英文のもので手に入った書籍は W. A. Craik, *Elizabeth Gaskell and the Provincial Novel* (Methuen, 1975) と Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (RKP, 1979) だけだった。19世紀英国の小説家の中でも、ジェイン・オースティン、チャールズ・ディケンズ、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、トマス・ハーディのような主流作家は、研究者に事欠かない。わたしはそうでない人を対象にして開拓者になろうと目論んだ。

いまは亡き指導教官でシェイクスピア学者だった蛭原 啓先生に意向を伝えたところ、「ギヤスケルは研究する人が少ないから、やり甲斐があるでしょう」と言って下さり、こうしてわたしの卒論のテーマは決まった。一人の女性を誠実に愛した凡庸な青年を描く『シルヴィアの恋人たち』は、わたしの性に合った。英語による小説を読んで涙したのはこの小説が初めてだった。以降、大学院でもギヤスケル研究を続けることにし、*Cousin Phillis* や *Ruth* について論文を書き、修士論文では *Mary Barton* を扱った。博士課程に進む頃には、ギヤスケルを生涯の研究テーマにしようと思うようになっていた。

愛媛大学に就職して間もなく、日本ギヤスケル協会が設立される旨、月刊誌『英語青年』（研究社）で知り、さっそく山脇先生に手紙を書いた。そのせいか、

1988年10月16日に協会設立大会が実践女子大学で開かれた際には、発起人の一人にわたしの名前があった。この時、敬愛する大先生に初めてお目にかかった。当時の会員名簿には83名の名前があり、そのうち今でも残っておられるのは、下記の17名(敬称略)——芦澤久江、阿部美恵、石塚裕子、金子史江、小池 滋、小松郁子、杉村 藍、鈴江璋子、鈴木美津子、多比羅真理子、玉崎紀子、角田米子、中村美絵、中村みどり、宮園衣子、脇山靖恵、それにわたし。



2007年大会にて
(9月30日、中央大学駿河台記念館)

以降、何かにつけて、先生には目をかけていただいた。翌年10月15日の第一回大会における研究発表に誘ってくださったり、協会の役員に加えていただいたり、もったいなくも、実践女子大に誘っていただいたり、会長に推薦して下さったりしたこともある。いまでこそ日本におけるギヤスケル研究者の数も増えたが、当時は本当にほとんどいなくて、わたしがその数少ない研究者の一人で、新進気鋭だったからだと思う。

その後、山脇先生が蒔かれた種をあとに続く者たちが着実に育てた。ギヤスケル協会は、作品の日本語訳や論文集の出版を行い、昨年2018年に創立30周年を迎えた。わたしもそのうちの一人として、微力を尽くした。いまでは、研究者としての学識を深めるべく周辺作家も研究対象に広げているが、やはりその中心はギヤスケルだ。彼女のことをいまだにマイナー作家視する英文学者もいるけれども、彼女の文学はまだまだ開拓の余地がある。周辺の他作家と比較しながら、文学史におけるその客観的な位置づけを試みるのも大切な作業だ。

というわけで、今日のわたしがあつたのも、けっきょくは山脇先生のご著書のおかげ。今頃は来世でギヤスケルと話をされていることだろう。いずれわたしもその仲間に加えていただく日が来るはず。そのときによい報告ができるように、現世でできるだけのことをするつもりです。

(日本ギヤスケル協会第4代副会長、熊本大学大学院教授)

『北と南』 —— 『シャーリー』の再構築 ——

白井 義昭

シャーロット・ブロンテの『シャーリー』(Shirley, 1849)の6年後に出版されたエリザベス・ギヤスケルの『北と南』(North and South, 1855)は、『シャーリー』同様、労働問題を扱っており、“industrial fiction”あるいは“Condition-of-England novel”とみなされ、『シャーリー』と関連づけて論じられることが少なくない(Bodenheimer 295; Lewis 243; Stevenson 10-16; Barbara Leah Harman 63-65)。しかし、両作品には労働問題以外にも、シンメトリカルな語りの構造や類似した固有名詞の使用など作品全体にわたり多くの対応関係が認められるのだが、これらの点について論じられることはあまりなかった。したがって本論ではこれらの対応関係を明らかにし、ギヤスケルがそれらにどのような変更を加えて『シャーリー』を再構築し、彼女がレディ・ケイ・シャトルワースに伝えていたこの作品のプロット上の欠点(Letters 116)を克服し、彼女自身が望む作品に作り替えていったのかを論じることとした。

1

『シャーリー』の大きな特徴は、作品冒頭の描写が巻末において再現されるという点だ。つまり、この作品は3人の助祭の登場で始まり、彼ら聖職者に対する風刺が綴られ、その後にロバート・ムアの労働問題や彼とキャロライン・ヘルストンとの恋愛、それにロバートの弟ルイ・ムアとシャーリーとの恋愛を語るメインプロットが挟まれ、最終章において再び3人の助祭が登場し、彼らのあまりに俗物的な現状が語られるという、シンメトリカルな語りの構造を持っているのだ。しかも物語の両端で彼らの過去と現在が対照的に描写され、その結果、巻末においてかなりの変質を経た彼らの実情が皮肉を込めて風刺される構造となっている。しかしこの構造が完全なシンメトリーになっているかという点と必ずしもそうだとはいえない。この後でロバートとキャロラインならびにルイとシャーリー

の二組の結婚式が挙行されるという結婚のエピソードが蛇足的に付け加えられるからだ。

『シャーリー』に触発されたのか、ギヤスケルはそこで認められたシンメトリカルな構造を『北と南』に取り入れている。この作品は結婚を間近に控えたマーガレット・ヘイルの従妹イーディスのロンドンにおける結婚の話題で物語が始まり、最後は同じくロンドンにおけるマーガレットの結婚の話題で完結する。この作品には『シャーリー』で見られた蛇足的なエピソードの付け足しはない。作品の巻頭と巻末は完全なシンメトリーを構成する。しかも会話文で始まり、会話文で終わるといふ、さらなる別種のシンメトリカルな構造を認めることもできる。

このようなシンメトリカルな構造は、『北と南』以前に出版された『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)と『ルース』(*Ruth*, 1853)には認められないが、『北と南』の次作『シルヴィアの恋人たち』(*Sylvia's Lovers*, 1863)では、『シャーリー』の影響が及んでいるためであろうか、それが認められる。つまり、この作品は漁港モックスヘイヴンのかつての様子描写で始まり、最終章の第14章でこの漁港が再登場するのだ。しかも『シャーリー』で認められたと同じように、巻頭と巻末でこの地の対照的な現状が提示されるという手法も用いられている。ギヤスケルの最後の作品『妻たちと娘たち』(*Wives and Daughters*, 1864-66)がシンメトリーを有しているか否かは、この作品が未完で終わっているために論じることはできない。

ギヤスケルは『北と南』で『シャーリー』のシンメトリカルな構造を引き継ぐにあたり彼女なりの味付けをする。『シャーリー』の語り手は巻頭で若い助祭の様子を紹介するときにロマンスを期待してもらっては困る、冷静になってもらいたいと読者に警告を発して読者の期待を裏切り(7)、教訓を求める読者に手引きを与えるのを控えて物語を終えていたが(740-41)、『北と南』ではそうではない。娘の結婚を控えて華やかな雰囲気は漂うロンドンの叔母の屋敷で物語が始まり、巻末は同じその叔母の屋敷で今度はマーガレットがソーントンと結婚するだろうという明るい見通しが立って終わるようになっていふのだ。ギヤスケルは『シャーリー』の技法に一ひねりを施し、読者の期待に沿う彼女流のエンディングに再構築しているといえる。

さらに両作品には以下に述べるようなきわめて興味深いコントラストが認めら

れる。『シャーリー』の巻頭部分に登場するのが男性の助祭たちであるのに対して、『北と南』の巻頭部分に登場するのはマーガレット、叔母それに従妹イーディスの女性たちである。また『シャーリー』で助祭たちの脇役として登場するのが下宿の叔母さんのミセス・ゲイルと女性であるのに対して、『北と南』の脇役的な人物はイーディスの婚約者キャプテン・レノックスという男性である。つまり『シャーリー』と『北と南』の巻頭部分では対応関係にある主役と脇役の人物の性がいずれも反転しているのだ。

巻末部分でも同様な反転関係は維持されている。『シャーリー』の場合には助祭たち、それに妻を従わせているムア兄弟のその後の男性の日常生活が描写されているのに対して、『北と南』ではマーガレット、叔母それに従妹ら女性たちのロンドンでの生活が描写されているのだ。

2

『北と南』を読んで最初に得られる感情は、この作品には『シャーリー』やブロンテに関係する固有名詞が頻発するということである。ギヤスケルが作中の固有名詞に何らかの意味を持たせていることはユグロウが指摘しているところで、たとえば「灰色の女」(“The Grey Woman,” 1861)のヒロイン、アンナ・シェラーにかしづく召使は“aptly called Amante” (Uglow 165)であるし、ルースの別れた恋人 Donne は 17 世紀の形而上詩人ジョン・ダンと関わりがあると思われる (Uglow 332)。さらに面白いことにギヤスケルは『ハウイツ・ジャーナル』(Howitt's Journal) に Cotton Mather Mills というペンネームで寄稿していて、このペンネームについてユグロウは “It suggests the setting—cotton mills—yet the central ‘Mather’, with its unconscious echo of ‘mother’, points to the buried central image of all three stories” (172) と、とても示唆に富むコメントを付けている。

それでは『北と南』ではどうなのか。マーガレットが父親と住んでいた故郷の村は Helstone である。これは『シャーリー』のヒロイン、キャロライン・ヘルストンから取ったと考えてよいであろう (Ingham 426-27)。さらに第 1 巻第 5 章には Heston (50) という地名が登場する。これは Helstone の作り替えであろうとインガムは推定する (429)。マーガレットの母親は北部の工業都市 Milton への移住を嫌がっていて、その母親をいかに説得するかに悩んでいた彼女の頭に浮

かんだのが、ミルトン近郊にヘストンという良い海水浴場があるということであつた。ヘストンは故郷ヘルストンと縁の浅からぬ地名であるがゆえに、それをだしにして母親をミルトンへ連れて行こうという魂胆である。海水浴場行きの話を進めるための命名の仕方となっているのだ。さらにミルトンという都市名は、非国教徒詩人ジョン・ミルトンを想起させる(鈴木 354)。実はミルトンは『シャーリー』の第2巻第7章で話題にされていたのである。

それでは人名の場合はどうであろうか。ミルトンの紡績工場主の姓名は John Thornton で、彼の苗字 Thornton はブロンテと大いに関わりのある同名の土地から取られているように思われる。ではソーントンとはブロンテにとってどのような場所であつたのか。1815年5月ブロンテ姉妹の父親パトリックは、友人トマス・アトキンソンと互いの教区禄を交換し、妻と幼子二人を引き連れてブラッドフォード近郊のソーントンへ越し、1820年までそこで過ごした。シャーロット、ブランウェル、エミリ、そしてアンが誕生したのは、ほかでもなくこの地であつた。ここでの滞在期間中だけ、彼らは地域住民と親しく交流した。パトリックがいつも語っていたことには、ここで過ごした5年間で最高の時間であつた(Claire Harman 19) という。ソーントンという町はブロンテ家にとってきわめて深い意味を持つ場所だつたわけであり、ブロンテを意識していたギヤスケルがマーガレットの結婚相手にソーントンという名前を付けたのは至極当然と思われる。さらに想像を膨らませれば、『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847)におけるジェインとロチェスターの恋愛の場であつたソーンフィールドをこの名前は思い起こさせなくもない。そう考えるならばこれはマーガレットの恋人にまさにぴったりの名前ではないだろうか。

もちろんこうした現象とは無関係に付けられた名前もある。ギヤスケルはジョンという名前が好きだったらしく『北と南』以外の作品においても多用しているのだが、¹それでもソーントンのジョンという名前は『ジェイン・エア』のジョン・リード、セント・ジョン・リヴァーズ、それにジョンの女性形であるジェインを想起させる。またイーディスの夫は Captain Lennox と、ファーストネームではなく、肩書で呼ばれていて、ここにシャーリーが男勝りゆえに Captain Keeldar (Shirley 227) と呼ばれていたことが反映されているとみなすことができるだろう。

ブロンテとの関連性が推測できる人名はさらに認められる。たとえば紡績熟練

工ニコラス・ヒギンズの娘 Bessy (“Betsy”とも綴られる)である。『ジェイン・エア』では“Bessie”となっていて、最後の綴りの部分が異なるものの、ギヤスケルのベッシーはジェインの世話をかいかいしくしてくれたこの女中から取られたと推察できる。

女中との関連でさらに付け加えるならば、ミセス・ソントンがマーガレット家に紹介した Martha という女性がいる。同名の女中はすでにブロンテの『ヴィレット』(Villette, 1853)にもミセス・ブレトンの女中として登場している。女中ではないが、さらにさかのぼるならば『教授』(The Professor, 1857)²にはハンズデンが求愛していた Sarah-Martha という女性もいる (The Professor 28)。

マーガレットの父親のオックスフォード大学時代の恩師で彼女の後見人となった人物は、人類の父祖を暗示する Adam をファーストネームに持ち、ブロンテ姉妹と切っても切れない苗字 Bell を持つ。周知のようにブロンテ姉妹は 1846 年に『カラ、エリス、アクトン・ベル詩集』(Poems by Currer, Ellis and Acton Bell, 1846) という詩集を自費出版した。ジェランは Bell がパトリック・ブロンテの助祭アーサー・ベル・ニコルズに由来するのではないかと述べている (185)。ニコルズは『シャーリー』ではマッカーシーとして描かれ (786)、最終章でマッカーシーは “he proved himself as decent, decorous, and conscientious, ... he was sane and rational, diligent and charitable” (724-25) と描かれている。『北と南』のベルはマッカーシー (=ニコルズ) 同様、大変真面目で実直な人物で、マーガレットの後見人として彼女の世話をそれこそ親身になってしてくれ、最終的には莫大な遺産を譲ってくれた恩人である。そのような人物にはやはりベルという名前が相応しい。ベッシーの父親の名前 Nicholas が Nicholls のつづり違いであり、もともとは同語であるというのも興味深い。

さらにヘルストン時代のマーガレットには作者と同名の Charlotte という召使もいた。『北と南』とブロンテの縁の深さを改めて感じざるを得ない。シャーロットといえば、彼女の母親と長姉も Maria という名前であったことを思えば、マーガレットの母親が同名であるのは偶然の一致にしては出来すぎであろう。やはりそこにはブロンテに対するギヤスケルの思いがあったはずだ。

以上からギヤスケルは『シャーリー』を始めとして、『ジェイン・エア』それにブロンテに関係するものから着想を得て『北と南』の人名・地名を命名してい

ることが知られたであろう。ギヤスケルは登場人物あるいは土地の名称をブロンテから（場合によっては、人名を地名に、反対に地名を人名に反転させながら）借用したうえで、『シャーリー』を彼女自身の物語に書き換えて再構築しているのだ。

3

ここでは地名ミルトンが『北と南』でいかに『シャーリー』の再構築に与っているかを見ていきたい。『シャーリー』不評の原因であるプロット展開の不安定さを克服するためにギヤスケルは『北と南』のヒロインをマーガレット一人に絞ることとした。彼女を巡る男性としては弁護士のヘンリー・レノックスと紡績工場主のソントンの二人しか置かず、しかもヘンリーは第1巻第3章でマーガレットに求婚したものの、彼女に断られるように仕立て、彼を彼女の恋の対象から外した。このようにしてマーガレットとソントンの恋の行方にだけ読者の目が注がれることとなった。しかもギヤスケルはこの恋愛のプロットと密接に関連づけながら労働問題のプロットを展開していった。ソントンとヒギンズの労働問題はマーガレットの仲介によって改善され、その改善が進むにつれて彼女とソントンの恋愛が進展するようになっていく。このようにして『シャーリー』では実現できなかったすっきりとしたプロット展開が可能となった。

マーガレットの恋路はミルトンという土地と大に関わっているように思える。前述したようにこの地名は『シャーリー』で言及されていた詩人ミルトンから取られたと推察できる。『シャーリー』第2巻第7章ではミルトンを引き合いに出し、この世は男性ではなく女性が創りだしたものの、というフェミニズム論が展開される。そのところを見てみよう。³ ある夕方のこと、シャーリーは教会には入ろうとせず、キャロラインとともに教会の外にいて彼女の自然観を述べる。それに対して、それはミルトンの見た夕べではないわねとキャロラインが念を押すと（359）、シャーリーはそのとおりと答え、ミルトンは天国も地獄もサタンも、サタンの娘である罪も、天使たちも見たが、ミルトンが見たのは「人類最初の女性」ではなく、ミセス・ジルのような料理人の女性だったと述べる（359）。しかし、本来女性とは台所において料理を作るだけの存在ではないはずだ、とシャーリーは主張する。ミルトンは男性に奉仕する料理人のような存在が女性だと考えている

が、実は“The first woman was heaven-born” (360) と語ってシャーリーは女性の優位性を熱く説く。彼女によればミルトンは父権制的な考えの持ち主ということになる。

それではこのように解釈された詩人の名前ミルトンを地名に用いて、ギヤスケルは『シャーリー』をどのように再構築して『北と南』に仕上げたのだろうか。この物語の大半はミルトンを舞台にして進められる。マーガレットの父親リチャードは英国国教会の教義に同意できないとして教区牧師を務めていたヘルストンを発ち、ミルトンへ転居してきた。夫の行動に妻は不満を覚えるものの、リチャードは妻の意向を完全に無視し自分の意思を通す。妻と娘は彼に従うだけである。彼はソーントンの家庭教師として生活を維持する。⁴

ミルトンにはもう一人父権制的な行動をする男性がいる。ソーントンである。彼は労働者に精勤を求め、彼らの貧困は彼らの努力不足によると考えるきわめて専制的な人物である。このようにミルトンという町には母権制とは相入れない思想を持つ強烈な個性の持主が君臨し、そこには強い父権制的な気配が漂っているのだ。この意味でこの土地が父権制的な思想の持ち主である詩人ミルトンの名を付けられているのは当然といえば当然である。

しかしながらその状況は徐々に変質していく。第1巻第22章はこの作品における男女の力関係を考えるうえで重要な章である。マーガレットは工場に押し寄せた労働者群集の面前に立ち、ソーントンを彼らの投石から守ろうとし、群衆の投石を受けて額に負傷する。その時までソーントンは逞しい工場主として君臨してきたのだが、この投石事件を機に、彼の人生はこれまでの工場主としての「男性」中心のものから「女性」の「仲介」を必要とするものに変わる (Stevenson 13)。

この事件以降ミルトンではマーガレットの存在感が増していく。1849年8月に母親が死亡すると、⁵ 父親と兄は悲しみにくれるだけで何もできず、葬儀の準備を含むすべてを彼女に任せる (232)。ここには己の信念に基づいて英国国教会から離脱したということから思い描かれたかつての強い父親像はもはや認められない。そもそもマーガレットの父親が男らしい強い男性であったのかというと、どうもそうではなく、実はきわめて女性的な容姿の持ち主 (77) で、それに見合った心の持ち主だったようである。このことは息子が官憲の目を逃れるために妻の

葬儀前に列車に飛び乗り、ミルトンを去った後の彼の行動から読み解くことができるように思われる。息子のその後の消息を案じ、彼は不安感を募らせていく。安楽椅子に静かに座って日を過ごしていたそれまでの習慣は途絶え、部屋を徘徊したり、部屋を出ては何の目的もなく寢室のドアを開けたり閉めたりするようになる。マーガレットは父親を落ち着かせるべく、あたかも幼子をなだめるように大きな声で本を読んであげるのであった (249)。

威厳を失った父親はマーガレットにとり迷惑な存在でしかない。だからであろう、1850年4月彼がベルの招待を受け、オックスフォードを訪問することになった時、この父親を駅で見送ったマーガレットは心の重荷が取れたような開放感に包まれる (313)。父親は彼女の保護者ではなく、むしろ彼女の世話を必要とする被保護者となっていたのだ。それゆえに父親の不在が彼女には大きな喜びとなった。しかも、あろうことか父親はベル家に滞在中に急死する。表現は適切でないが、彼女の行動を束縛していた男性の消失である。

ベルはマーガレットに彼女の父親の死亡を告げる手紙の中で、自分が死亡したときには彼女に彼の遺産を贈与することを約束してくれた (331)。それから間もなく彼は卒中発作に襲われ、命を落とす。彼の死はマーガレットにとって大きな悲しみであった。しかしこのことが女性としての彼女の生き方に否定的に作用したとは言い難い。第2巻第24章はマーガレットに同行してオックスフォードへ行った夫に“Is not Margaret the heiress?” (374) と呟くイーデイスの声から始まり、これ以降『北と南』は、遺産を手にして資産家となったマーガレットが如何にミルトンという男性中心であった共同体を女性中心の共同体に変貌させていったかの物語となる。イーデイスによればマーガレットの遺産は動産2千ポンド、不動産4万ポンド (374) である。マーガレットは叔母の家に同居する中で、ついに他人に頼り切らない生き方をしようと努める (377)。ベルの屋敷を遺贈された彼女は、ソートンを借家人とする大家 (382) となるのだ。

これに対応する『シャーリー』ではどうであったのか。シャーリーは、父権制的な思考の持ち主である詩人ミルトンを批判し、母権制的な主張をするものの、マーガレットとは異なりロバートを守るといった勇ましいフェミニスト的な行動をとらず、かつての家庭教師であったルイを“My master” (709) (「教師」と「主人」の意味を持つ) として仰ぐ、男性に従順な女性となり、これまでの女性のよ

うに彼の妻の座に安住する。

他方ロバートは、労働者の暴力を受け、瀕死の重傷を負い、キャロラインの手厚い看護を受けるなかで人間性を回復するものの、物語の終盤に来て、彼を悩ましていた枢密院令が撤回され、破産を逃れて実業家として再出発できる見通しが立つと、男としてのプライドを再び獲得してついにキャロラインに結婚を申し込むこととなる。きわめて常套的な表現であるが、そのときのプロポーズの言葉とキャロラインの返答はまさに二人の主従関係を表しているように思われる。

His hand was in Caroline's still: a gentle pressure answered him.

“Is Caroline mine?”

“Caroline is yours.” (733)

キャロラインはロバートの所有物 (“mine”) となるのである。その場で彼は結婚後の未来像を彼女に語る。弟と彼とでブライアフィールドの教区を分割所有し、フィールドヘッドの主人となった弟は地区の治安判事になり、ロバートは茂っている雑木林を伐採し、そこに道路を敷設し、家を建築し、工場を拡張し、多くの労働者に仕事を与え、さらにはキャロラインのために日曜学校を造るつもりだという。まさに一人の男による “Extravagant day-dreams” (738) である。このように『シャーリー』は母権制を主張していたかに見えながら、最終的には二人のヒロインが夫に従うという、従来の結婚観を引き継いで物語の終わりを迎えようとするのであり、ここには詩人ミルトンが支持する父権制への揺り戻しがある。

マーガレットが大家となった後の『北と南』のミルトンという空間は、ますますマーガレットが上位に立つ女権制的空間へと転じる。労働者を “hands” (113) と呼んで彼らを手足のように扱っていたソーントンの事業経営は悪化の一途をたどり、ついに彼はそれまで心血を注いできた事業を閉鎖する羽目に陥り、ハンパー氏の息子が経営する会社の共同経営者になったらという依頼を拒み、鬱々とした日々を過ごすこととなる。そうした彼を救うべくマーガレットは彼に 18,057 ポンドを貸すという驚くべき提案をする (394)。ソーントンはこの提案にマーガレットの彼への愛を確認し、彼女へプロポーズし、彼女は彼のプロポーズを受ける。彼は彼女への強い愛の証として、彼女の故郷ヘルストンで摘んできたバラを

彼女に差し出す。マーガレットはそのバラを受け取るのだが、そのときの““You must give them to me,” she said, trying to take them out of his hand with gentle violence” (395) の最後の 2 語に注目したい。彼女は女性らしく“gentle”にはあるけれども、しかし“violence”を持って彼のバラを受け取る。この表現からは男性に従順に従うという女性像を思い描くことはかなり難しい。

『北と南』は母権制的色彩を濃くした物語へと変質したのだ。このように変質した物語世界では男性は重きをなさない。この作品の最後はまさしくそのことを雄弁に物語っている。マーガレットとソーントンの二人の運命を左右するのはショウ叔母とミセス・ソーントンの女性二人の反応だ。しかもこの二人の反応の中で重い比重を占めるのは““That man!” (396) ではなく、“That woman!” (396) の方だ。従妹へ呼びかけるマーガレットの声で始まったこの作品世界は、マーガレットによる女性への言及で終わる。

4

これまで『北と南』を『シャーリー』と関連させながら論じてきた。シンメトリカルな語りの構造、類似した固有名詞の使用、恋愛と労働問題を主軸とした二つのプロット展開など両作品には多くの対応関係が認められた。しかし、巻頭部分と巻末部分における中心的な登場人物が『シャーリー』では男性であるのに対して『北と南』では女性であり、中間部分では主要人物が『シャーリー』では男性から女性へ、そして最後に再び男性へとゆらぐのに対して、『北と南』では男性から女性へ移るのみという相違がみられた。プロットの面では『シャーリー』では聖職者への風刺——労働問題——恋愛問題——そして再び聖職者への風刺と移り変わり、それにあわせて登場人物たちの行動が父権制——女権制——父権制と揺れ動くのに対して、『北と南』では恋愛問題と労働問題の二つのプロットが精妙に関連しながら発展し、それにあわせて登場人物たちの行動は父権制的なものから女権制的なものへと一本の道を着実に歩んできた。

こうしたことから両作品の関係は、写真に例えるならば、一部多少の例外はあるが、ネガ（陰画）とポジ（陽画）の関係にあるといえるのではないだろうか。なぜならば『シャーリー』で描かれる物語世界の色彩が『北と南』では反転するからである。Shirley という名前が女性名ではなく本来は男性名（Shirley 221-22）

であり、かつギヤスケルが当初は『北と南』のタイトルを女性名の *Margaret Hale* としていた (Easson xii) ことを思いだすならば、タイトル同士も男性から女性に反転していることになる。形態は同じだが、色彩に相当する物語風景の白黒が反転しているのである。

面白いことに *OED* によれば、写真術におけるこのような意味でネガ・ポジが英国で使われはじめたのは『北と南』の最初のエピソードが『家庭の言葉』 (*Household Words*) で発表される一年前であった。⁶ ということは『北と南』執筆中にギヤスケルがそのような写真術の技法を知っていた可能性があるということであり、その技法を文学に転用したと推察できなくもない。

ギヤスケルは自分が思い描くのととは真逆な像が『シャーリー』に描かれていると感じ、それを反転させて彼女がまさしく思い描いていた像を完成させた。ネガとして映し出されていた物語世界をポジに現像することによって『シャーリー』を再構築したのである。マクラムは 2015 年に『ガーディアン』紙 (*The Guardian*) で英国小説 100 選を発表した。残念ながら『北と南』は選に漏れた。熟考の末に不採用としたのはギヤスケルの魅力が理解できなかったからだと言明している (McCrum)。しかし、もし彼がこの作品がブロンテの『シャーリー』を強く意識して執筆されたこと、そして『シャーリー』とはネガ・ポジの関係にあったことを認識していたならば、違った選択をしたかも知れないと残念に思えて仕方がない。

注

本稿は日本ギヤスケル協会第 30 回例会 (2018 年 6 月 2 日、於岡山国際交流センター) での講演に加筆修正を施したものである。

- 1 『北と南』以前の『メアリ・バートン』ではメアリの父親、それに彼女の恋人の父親で工場主にそれぞれ John という名を付け、またメアリの幼馴染ジュムの母親には Jane という名を付けている。『従姉フィリス』 (*Cousin Phillis*, 1863-64) の語り手の父親も John である。『妻たちと娘たち』ではヒロインの通い家庭教師 (daily governess) が Miss Eyre と名付けられているのも興味深い。

- 2 この作品は『ジェイン・エア』出版以前に完成していた。
- 3 この辺の議論は Day に負う。また白井 14-15 と重なるところがある。
- 4 『シャーリー』ではレイがかつてシャーリーの家庭教師であったという設定になっており、そのことがリチャードとソントンの関係に反映されているとみなすことは可能であろう。
- 5 物語の時間構成については Ohno と大野を参照。
- 6 OED:

negative, *n.*

8. a. *Photogr.* A print made on specially prepared glass or other transparent substance by the direct action of light, in which the lights and shadows of nature are reversed, and from which positive prints are made.

1853 W. H. T. *Photogr. Manip.* (ed. 2) 14 Fifth operation. Fixing the negative.

positive, *n.*

5. *Photogr.* A picture in which the lights and shadows are the same as in nature: opposed to NEGATIVE *n.* 8.

1853 *Fam. Herald* 3 Dec. 510/2 To obtain from those pictures good prints or positives.

引用文献

- Allott, Miriam, editor. *The Brontës: The Critical Heritage*. Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Bodenheimer, Rosemarie. "North and South: A Permanent State of Change." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 34, no. 3, December 1979, pp. 281-301.
- Brontë, Charlotte. *The Professor*. 1857. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford Clarendon P, 1987.
- . *Shirley*. 1849. Edited by Herbert Rosengarten and Margaret Smith, Oxford Clarendon P, 1979.
- Day, Paula. "Nature and Gender in Victorian Women's Writing: Emily Brontë, Charlotte Brontë, Elizabeth Barrett Browning, Christina Rossetti." Diss. U of Leicester, 1990.
- Easson, Angus. Introduction. *North and South*, by Elizabeth Gaskell, Oxford UP, 1982, pp. ix-xviii.
- Gaskell, Elizabeth. *The Letters of Mrs Gaskell*. Edited by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, Mandolin-Manchester UP, 1997.

- . *North and South*. 1854-55. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 7. Edited by Elisabeth Jay, Pickering & Chatto, 2005.
- . *Wives and Daughters*. 1864-66. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 10. Edited by Josie Billington, Pickering & Chatto, 2006.
- Gérin, Winifred. *Emily Brontë: A Biography*. Oxford UP, 1971.
- Harman, Barbara Leah. *The Feminine Political Novel in Victorian England*. UP of Virginia, 1998.
- Harman, Claire. *Charlotte Brontë: A Life*. Viking, 2015.
- Ingham, Patricia. Notes. *North and South*, by Elizabeth Gaskell, Penguin Books, 2000, pp. 426-49.
- Lewis, Michael D. “Democratic Networks and the Industrial Novel.” *Victorian Studies*, vol. 55, no. 2, Winter 2013, pp. 243-52.
- McCrum, Robert. “The 100 best novels: from Bunyan’s pilgrim to Carey’s Ned Kelly.” *The Guardian*, 16 Aug. 2015, www.theguardian.com/books/2015/aug/16/100-best-novels-bunyan-to-carey-robert-mccrum.
- Oxford English Dictionary*. 2nd edition. CD-ROM. Oxford UP, 2009.
- Ohno, Tatsuhiko. “The Chronology of *North and South*.” *Kumamoto Journal of Culture and Humanities: Studies in Literature and Language*, vol. 87, 2005, pp. 21-31.
- Stevenson, Catherine Barnes. “Romance and the Self-Made Man: Gaskell Rewrites Brontë.” *Victorian Newsletter*, vol. 91, Spring 1997, pp. 10-16.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber, 1993.
- 大野龍浩、「『北と南』」、『ギヤスケルの文学——ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する』松岡光治編、英宝社、2001年、112-39頁。
- 白井義昭、「シャーロット・ブロンテの風景——最後の一笔」、『ブロンテ・スタディーズ』第6巻第1号、2015年、1-30頁。
- 鈴木美津子、「『北と南』とロマン主義時代の歴史小説」、『エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』、日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2010年、347-57頁。

(日本ブロンテ協会前会長、横浜市立大学名誉教授)

North and South: Shirley Reconstructed

Yoshiaki SHIRAI

Charlotte Brontë's *Shirley* and Elizabeth Gaskell's *North and South* belong to the genre of "industrial fiction" or "Condition-of-England novel" and have been discussed mainly from the point of labor and capital. It has, however, scarcely been noticed that they share other characteristics: a symmetrical narrative structure and the use of similar proper names. Gaskell adds a new twist to them in *North and South* in order to reconstruct *Shirley*, which has been held in disrepute for lacking a consistent plot sequence.

Gaskell reverses the gender of the main characters from male to female and converts Brontë's unstable narrative structure, which sways between patriarchy and matriarchy, into a matriarchal one. What surprises us more, moreover, is Gaskell's exquisite use of proper names in *North and South*. Besides using proper names connected with the Brontë family in her novel, she borrows some place names from *Shirley* and reverses them into people's names and vice versa. The name of Milton is not an exception. He is alluded to as a patriarchal poet in *Shirley*. Gaskell converts his name to that of heroine's hometown. The town Milton is stripped off of patriarchal nature attached to Milton the poet, and matriarchy comes to be dominant there. Furthermore, the titles of the two novels are also subject to this reversal mechanism. Considering that "Shirley" is in origin a male name and that the original title of *North and South* was *Margaret Hale*, it is clear where Gaskell's hidden intent lies.

Gaskell rectifies the defects of *Shirley* by reversing most of its aspects into contrary ones in *North and South*, and reconstructs it into a novel of matriarchy.

“Making Money out of the Dead”: Financial Aspects of *The Life of Charlotte Brontë*

Arisa NAKAGOE

I. Introduction

Like many literary biographies in history, when Elizabeth Gaskell wrote *The Life of Charlotte Brontë* (1857) (hereafter abbreviated as *The Life*),¹ the representation of Charlotte Brontë as well as her family had been neatly manipulated and arranged, according to her own creed to “honour the woman as much as they [the world] have admired the writer” (*Letters* 345). The common consensus is that Gaskell’s intention was to portray Charlotte as an ideal Victorian woman within “the safety of womanliness” (Heilbrun 22). Deep down, as Felicia Bonaparte suggests, *The Life* is intertwined with Gaskell’s purpose to justify her own literary ambitions and to survive as a woman writer in the Victorian period (Bonaparte 232). Previous studies have looked at various aspects of this strategy, such as the partial fictionality of *The Life*, its status as displaced autobiography or vindication, and its dramatization of the friendship and rivalry between Charlotte and Gaskell.

On the other hand, less attention has been paid to the financial side of the making of this biography. It must be kept in mind that Gaskell was a professional writer and that earning money was an indispensable motive behind her works. This paper delves into Gaskell as both a biographer and a businesswoman. How did the mercenary side of her character influence the editorial decisions she made in the biography? What kind of choices did she make? And why did she want that for Charlotte and herself? The focus of this paper is on the way in which Gaskell manipulated and rearranged biographical facts and passed over some incidents in Charlotte’s life. As Linda H. Peterson notes, “Gaskell minimize[d] the professional aspects of Brontë’s career, exclude[d] financial details from Brontë’s letters to her publisher, and show[ed] her subject as much more interested in ideas than in profits” (68). This paper argues that such a minimization was because of

Gaskell's original motivation to portray Charlotte as an epitome of femininity, and that her intention to simultaneously conceal her own financial interest; earning money as a professional was commonly seen as "unwomanly" in the Victorian standard. However, at the same time, Gaskell did want to earn from selling this biography, and there were literary choices she made upon writing it in order to make it more marketable.

This paper firstly positions Gaskell both professionally and privately as a financial agent, or a keen investor in business since early adulthood. Secondly, this paper illuminates *The Life* in a commercial light, examining what makes it attractive in the literary market. Thirdly, the legal issues concerning *The Life* are discussed, which are arguably underpinned by Gaskell's fear of economic loss and injury to her professional career. Lastly, the question of whether the biography was a success or not is debated, both as a shorter-term financial investment and a long-selling literary classic.

II. Gaskell as a Financial Agent

This section studies Gaskell as a financial agent, who simultaneously sought to avoid the Victorian social stigma against women going out into the public sphere and earning money. In the literary world as well, some female writers like George Eliot and the Brontës themselves preferred to use male pseudonyms. However, it is not my intention to create a simple financial dichotomy between Victorian men and women. I want to scrutinize how Gaskell handled her own image when the society harbored ambivalent feelings toward Victorian woman thriving in the economic sphere. That is to say, Gaskell did not explicitly or publicly discuss her own financial matters (though she advocated improved conditions for the poor) but kept the matter to herself and close people only via personal letters. Consequently, in *The Life*, Gaskell decided to minimize reference to Charlotte's investment and not to include financial details during her career in the biography, in order to exempt Charlotte from being labelled "unwomanly" and also to save herself from the same accusations.

Firstly, although Gaskell is commonly regarded as a politically moderate, conservative and gentle lady, in fact her private letters reveal that she was an active participant in the investment market, which was allegedly constituent of the masculine public sphere

in the Victorian period. The fact that she invested 1,500 pounds in the St. Katharine Docks after the success of *Mary Barton* (1848) and that she continued to depend on the dividends until her death is not popularly known (Henry 85-86). She keenly wrote to Edward Holland that his proposal about the St. Katharine Docks Shares seemed “advantageous” and that 1,500 pounds would be invested for herself, not others (*Letters* 827). Indeed, Gaskell had been exposed to international trade and commercial networks of Unitarians since childhood. Gaskell’s uncles, Swinton Holland and Samuel Holland, were in banking business in London and Liverpool respectively. When she was young Gaskell herself occasionally spent time in important commercial and industrial cities like London, Liverpool and Newcastle with her family and friends involved in international business (Henry 94-97). Moreover, in both the Holland (Gaskell’s grandmother’s side) and the Stevenson (Gaskell’s mother’s side) families, women often managed money (Henry 97). So, Felicia Bonaparte’s argument that Gaskell is “not interested in the economic ends of things” (141) should be regarded as an overstatement. Gaskell’s criticism of capitalism found in *Mary Barton* and *North and South* (1854-1855) is in fact clear evidence of her own interest in economics, which could also be interpreted as a product of her self-reflection as a comparatively wealthy individual or even a capitalist.

In turn, it is essential to point out that Gaskell was not the only female financial agent in the Victorian era. Many other female writers too, like Maria Edgeworth and Hannah More, invested money they earned from their writings “as a supplement to their income,” and they also “depended on such investments to secure their financial independence” (Henry 32). However, many such agents preferred to remain anonymous or were neglected: “Victorian women were active investors and shareholders, ... contemporaries were well aware of this, and ... there was much comment about the phenomenon, most of it negative” (Robb 1). Indeed, the financial successes of Victorian women were not always praised. Victorian female investors “confronted a set of cultural prejudices against their participation in the market” (Henry 2-3). Gaskell took care to cope with these issues; the fact that Gaskell’s connection with St. Katharine Docks is not prevalently known suggests that Gaskell was good at controlling her own public image.

The Brontës themselves too invested in railways in the 1840s. In *The Life*, although

Gaskell mentions the failure of the Brontës' railway investment, she minimizes its significance and puts it in a context that does not highlight Charlotte's financial ambition but rather pictures her as a tragic heroine who obeyed her family's decision. In addition, Gaskell never mentions the amount of the investment and gives the reader the impression that it was only small. She quotes Charlotte's letter to Miss Wooler, her former teacher: "I thought you would wonder how we were getting on, when you heard of the railway panic, and you may be sure that I am very glad to be able to answer your kind inquiries by an assurance that our small capital is as yet undiminished" (*The Life* 218). Gaskell narrates later on that "[t]here was misfortune of another kind impending over her. There were some railway shares, which, so early as 1846, she [Charlotte] had told Miss Wooler she wished to sell, but had kept because she could not persuade her sisters to look upon the affair as she did, and so preferred running the risk of loss, to hurting Emily's feelings by acting in opposition to her opinion" (*The Life* 304). Gaskell therefore succeeds in implanting the image of Charlotte as a naïve and docile mind who puts her family members' feeling over economic loss.

Secondly, whereas Gaskell started off her writing career with *Mary Barton* to console herself after the death of her infant son, the nature of her literary career changed into something public and professional, which drove her to earn the profit she thought she deserved. Her letters give evidence of her negotiation skill with the publishers in regard to advances, income, and copyright. Furthermore, the voice in her private business letters is sharp and to the point, which strikes a contrast to the mild narration in her publications. The above characteristics hold true for her correspondence with George Smith about the publication of *The Life*.

In the final paragraphs of her letter to George Smith on 26 December 1856, Gaskell is trying to negotiate the amount of money she would like to receive for the biography. "And now to the money business," she begins straightforwardly — this is Gaskell's typical way of opening up a conversation about financial matters — "I must deal frankly with you, as I wish, the terms proposed for the Biography are below what I thought I might reasonably expect" (*Letters* 430). Compared to *North and South*, for which she received 600 pounds retaining the copyright, she says, the biography has consumed so

much of her time and energy, nearly the double the labor she would put into a novel. She also comments the biography would be likely to gain a wider class of readers and that the demand would be high. She mentions her travel costs to do her research and collect materials. Put in a nutshell, she is piling up reasons for a better offer from the publisher. Then, she concludes, “I have put these points before you, in order that you may judge whether I am unreasonable or not in expecting some advance on your present offer” (*Letters* 431). She consequently managed to receive 800 pounds for *The Life*. This incident, as a whole, is a revelation of her skillful persuasion and candidness when it comes to money matters.

III. Gaskell’s Attention to Commercial Market

As stated in the previous section of this paper, Gaskell was a businesswoman to the core, and her acute awareness of the market was in operation while writing the biography, though not explicitly shown. Subsequently, *The Life* turned out so popular that in the month following its publication, Smith, Elder & Co. issued its second edition, which sold just as quickly until they had to recall unsold copies. The reasons for this are explored later in the following section of this paper. This section looks at some advertisements by Smith, Elder and Co. and the biography as physical books, and then investigates Gaskell’s sense of balance that made *The Life* attractive to its readers and commercially successful.

First of all, *The Life* was something new in the literary market. The biography was a woman’s writing of another woman, which was not common at the time, at least not with significant predecessors. Gaskell was aware of this, and she advertised the feminine quality of the biography as much as she could, even before the reader turned to page one. Gaskell used “Charlotte Brontë” for the title, rather than “Currer Bell,” while reassuring the readers that she was the “AUTHOR OF ‘JANE EYRE,’ ‘SHIRLEY,’ ‘VILLETTE,’ &c” (*The Life* 1) on the title page. She also introduced herself as “AUTHOR OF ‘MARY BARTON,’ ‘RUTH,’ &c” (*The Life* 1). It is particularly noteworthy that the titles selected here are the names of strong female heroines, which creates the imagined community of female solidarity. On top of that, on the title page, Gaskell quotes from “AURORA LEIGH”: “Oh my God,/Thou hast knowledge, only Thou, How dreary ’tis for women

to sit still/On winter nights by solitary fires/And hear the nations praising them far off.” This could be interpreted as both an emphasis on the femininity of the biographer, female strengths, and the exclusiveness of the information which she had obtained.

Smith, Elder & Co. put considerable effort into the advertisement as well. In their 1857 *A Catalogue of New and Standard Works, Published by Smith, Elder and Co.*, the first book listed there was indeed *The Life*. The explanation reads, “MRS. GASKELL’S MEMOIRS OF CURRER BELL ... with a Portrait of Miss Brontë and a View of Haworth Church and Parsonage” (Smith 2). The two inserted pictures are selling points; the former reveals the face of the author who originally wished to remain unknown from the world, and the latter strongly connects the Brontë sisters with the exoticized place, evoking the sense of tourism, which is another form of consumption: “There had been a trickle of tourists ever since the publication of Shirley and the identification of ‘Currer Bell’; in the wake of Mrs Gaskell’s powerful and emotive descriptions of the place, this now became a flood” (Barker, *The Brontës* 810). Also, on the same catalogue, the novels by the Brontë sisters are advertized in the section, “Uniform Edition of the Works of Currer Bell” (Smith 10), as if to increase marketing synergy. Indeed, “[t]he dramatic effect of *The Life of Charlotte Brontë* was ... felt on the sales of the Brontës’ novels” (Barker, *The Brontës* 810).

The contents of Gaskell’s writing had to be sellable too, and the major commercial or reader-oriented decisions she made were vividness of characterization and use of anecdotes, which were sometimes exaggerated. Jennifer Uglow reveals that “[a]t the end of the bound manuscript of *The Life of Charlotte Brontë* are two loose sheets of quotations, perhaps copied by Elizabeth to guide her thoughts” (406). These quotations are from the *Quarterly Review* of 1856: “Get as many anecdotes as possible, if you love your reader and want to be read, get anecdotes!” (qtd. in Uglow 406). It is commonly argued that Gaskell sensationalized Patrick Brontë’s eccentricity, such as in the episode in which he fired pistols and scared his wife (*The Life* 42). She also included gossip-like stories about Branwell’s affair with Mrs. Robinson and revealing things too personal like the fact that Charlotte’s undergarment was children’s size (*The Life* 356).

The above editorial decisions then connect to and intertwine with another point.

It is Gaskell's sense of balance in her writing of *The Life*. She surely engaged herself in commercially appealing side stories, but she fulfilled her non-mercenary mission too. The mission was the celebration of Charlotte as a model Victorian woman. Sometimes, stories were not only added but also subtracted. For instance, Gaskell chose to remain silent about Charlotte's unrequited love for Monsieur Héger, and blamed her return from Belgium, not her broken heart for Branwell and Patrick's declining health. This is why Gaskell failed to write about the romance between Charlotte and Héger; she prioritized the protection of her friend's reputation over an episode that could be another source of juicy gossip. In turn, not being too sensationalist was another key to Gaskell's success. If a biography were too full of tabloid dramas, it would not be accepted seriously, and Gaskell's own reputation as an acclaimed author would consequently suffer from it.

In order to make the biography readable, Gaskell often created easy-to-follow stereotypes for characters. For an insight into smaller details of *The Life*, the most prominent examples studied here are the characterizations of Anne and Emily in contrast to Charlotte. Out of the three talented sisters, Gaskell had to focus on and commend Charlotte. Throughout *The Life*, Gaskell constantly arranged her interviews, letters, and other materials to highlight the differences between Emily's violent and selfish nature, Anne's immaturity and fragility, and Charlotte's sensible, domestic, and mature qualities.

The first memorable anecdote in *The Life* about the sisters comes from their father, Patrick Brontë. Although it is a recollection of a conversation with them when very young, this serves well to outline the characteristics of the three sisters from Gaskell's point of view, which holds throughout the biography.

I [Patrick Brontë] began with the youngest (Anne, afterwards Acton Bell), and asked what a child like her most wanted; she answered, "Age and experience." I asked the next (Emily, afterwards Ellis Bell), what I had best to do with her brother Branwell, who was sometimes a naughty boy; she answered, "Reason with him, and when he won't listen to reason, whip him." ... I then asked Charlotte what was the best book in the world; she answered, 'The Bible.' And what was the next best; she answered, "The Book of Nature." I then asked the next what was the best mode of education

for a woman; she answered, "That which would make her rule her house well." (*The Life* 47)

While what Anne wanted underlines both her immaturity and modesty, Emily's words, especially "whip him," signify her ferocity and her strength over a male who is even older than her. Such eccentricity may remind the reader of the previous anecdote about her father. However, despite such a family environment, Charlotte's Christian values and high morality are foregrounded as an embodiment of the Victorian "Angel in the House." On the whole, Gaskell uses this anecdote to show that Charlotte is the most admirable of the three girls. The paragraph structure is effective too; Charlotte comes after Emily, which emphasizes the drastic difference between Charlotte's domestic quality and Emily's wildness.

Gaskell's description of Charlotte's relationship with her sisters appears after the above anecdote in Gaskell's perspective: "Charlotte's deep thoughtful spirit appears to have felt almost painfully the tender responsibility which rested upon her with reference to her remaining sisters.... Emily and Anne were simply companions and playmates, while Charlotte was motherly friend and guardian to both; and this loving assumption of duties beyond her years, made her feel considerably older than she really was" (*The Life* 62). The keywords here are "responsibility" and "duty," common Victorian words in the discourse of feminine domestic obligation, which helps emphasize the image of Charlotte as a good "mother" to the younger ones. Gaskell ties Emily and Anne to Charlotte who feels "painfully" about them, creating the sense of self-sacrifice while her sisters are given an aura of innocent playfulness. What is significant here is not only the content but also its arrangement. Gaskell makes the story told by the father, followed by her explanation to provide the reader with a vivid first impression and then her interpretation. As a result of such readability, Gaskell succeeds in thoroughly guiding and convincing the reader to accept her view on Charlotte.

IV. Gaskell's Management of Legal Issues

Writing a biography that could damage the reputation of actual people is

commercially interesting but legally risky. This section studies the letters between Gaskell and her editor George Smith and the influence of the correspondence on the biography, especially the careful tactic they together schemed in regard to the three persons who Gaskell wanted to defame.² The first one was Newby, the second one was Lady Eastlake, and the last one was Mrs. Robinson (Lady Scott). Gaskell tried to stay within the law though. However, this circumspection could be interpreted as Gaskell's tactics to evade potential fines and other financial loss. Again, Gaskell was a careful businesswoman, who did not want to injure her career as a professional writer, and at the same time, editorial decisions were sometimes made so that they would benefit Gaskell's original intention of portraying Charlotte's ideal womanhood or Gaskell's own self-portrayal as a mild character.

Firstly, Gaskell wished to warn other people not to trust Newby: "Do let me abuse Mr Newby as much as I dare, *within the law*" (*Letters* 432). Newby's problem enraged Gaskell so much, partly by the fact that her friend had been cheated and perhaps also because Gaskell projected herself onto Charlotte as a professional writer; Newby was someone who damaged Charlotte's business. Back in the 1850s, when there were many doubts and rumors about the true identities of Currer, Ellis and Acton Bell, Newby advertized to his American house that *Agnes Grey* and *Wuthering Heights* were written by the same author that wrote *Jane Eyre* so that Anne's new novel *The Tenant of Wildfell Hall* (1848) would sell well in America where *Jane Eyre* had won a great reputation. George Smith was upset to hear about it and wrote a letter to Currer Bell to check if Currer, Ellis and Acton were three separate authors and if his author was not publishing with Newby. Of course, the sisters were shocked, and the only remedy that Charlotte could think of was to confront George Smith by going to London and reveal their true identity.

About Newby, however, Gaskell complied in the end with Smith's decision to take out what the publisher would rather not include in *The Life* so that they would be on the safe side legally and business-wise. It can be safely observed that Smith and Gaskell underwent cautious discussions about the matter with a special attention to the law. In one letter Gaskell writes: "I *think* you [Smith] said that when this part was formally submitted to you, you would see that I steered clear within the laws.... Had I better consult some of

my lawyer friends, as to what words I may use. [O]r will you undertake to take out what you wd rather not have in" (*Letters* 428-29). Smith's opinion seems to have been decisive, and consequently Gaskell never directly mentioned the name of Newby in *The Life*, did not write about his bad intentions (she merely wrote that Newby made a simple mistake about the identity of the author "to the best of his belief" [*The Life* 268]), and the whole drama of the sisters deciding whether they should reveal their identity is minimized, though the story could have been another sensational episode to be featured.

In *The Life*, Gaskell swiftly summarizes the sisters' action: "With rapid decision, they resolved that Charlotte and Anne should start, for London, that very day, in order to prove their separate identity to Messrs. Smith and Elder.... The two sisters ... were whirled up by the night train to London" (*The Life* 268). The "two sisters" mentioned here are Charlotte and Anne; Gaskell deliberately did not explain why Emily did not join them or what happened afterwards. Initially, Charlotte did not intend to reveal information about Emily who had been keen to keep her anonymity. In London, however, Ellis Bell's real name slipped out of her lips, which she later confessed to Emily. Of course, this infuriated Emily. So, Charlotte had to write a letter to London, saying that "I committed a grand error in betraying his identity" (*Wise* 2: 241). This was written more than three weeks after their visit to London, which indicates how long Emily's anger continued (Gérin 233). Such confirmation of Charlotte's failure would destroy the myth of the friendly sisterhood. Gaskell dexterously avoided that.

Secondly, as for Lady Eastlake, who criticized *Jane Eyre* in the *Quarterly Review*, Gaskell was enthusiastically ready to attack her as well. It can be assumed that Smith as an editor intervened to some extent, and that Gaskell changed her mind for her own reasons. In the completed biography, Gaskell ended up writing only a paragraph on the unfavorable article by Lady Eastlake, to which she gives no importance. She does not bring out her name either. Gaskell writes, "Every one has a right to form his own conclusion respecting the merits and demerits of a book. I complain not of the judgment which the reviewer passes on *Jane Eyre*" (*The Life* 281). In turn, this serves to highlight Gaskell's own tolerance toward any negative criticism of her own literary works. Not libeling Lady Eastlake, Gaskell chose to advertise her own self-restraint.

Thirdly, the problem of Lady Scott is of utmost importance because, despite Smith and Gaskell's efforts to avoid legal offenses, they were sued by the lady and had to publish a revised third version of the biography. Prior to the first publication, in a letter to Smith, Gaskell writes aggressively; "[i]t is possible that it would be wiser not to 'indicate so clearly' (I was not aware that I had done so,) the lady concerned in Branwell's misdoing. I will see how this can be altered" (*Letters* 428). Then she asks Smith where exactly in the text he is talking about. It is clear that Smith was careful about any reference to Lady Scott in the biography, and Gaskell's manuscript had to go through several changes before publication. Although Gaskell did not explicitly mention her name in the book, it was easy for the public at the time to guess who Gaskell was referring to. Lady Scott, labeled a "wicked woman" (*The Life* 205), felt ashamed and angry, perhaps all the more so for Gaskell's sensationalization of the incident.

Ironically, however, the legal fuss with Lady Scott triggered more attention to be paid to *The Life* by the public, which resulted in another wave of commercial popularity. On 26 May 1857, all unsold copies of the biography were recalled after the legal threat announced by Lady Scott's solicitors, who demanded a public apology and revision. As Uglow claims, "The Scott-Gaskell battle was the choicest gossip of the month, and the buzz spread far and wide" (427). After summer, Gaskell published the third edition of the biography. In the newer version, she withdrew the episode of Lady Scott. Although Gaskell kept Branwell's addictions to drugs and alcohol in *The Life*, she never clarified what she meant by his "cruel, shameful suffering" (*The Life* [Oxford UP] 226) that led him to such self-destructive habits.

Throughout the process of revision as well, Smith acted as Gaskell's helper. For example, Gaskell wrote to him on 5 June 1857, "How had omissions better be made ...? And how had I better send you the corrections ...?" (*Letters* 451). One would not go so far as to say that Smith is a co-author of *The Life*, but the letters are evidences of his intervention, which cannot be ignored in the study of the biography, especially if one looks at issues that Gaskell felt strongly about, or issues that necessitated discretion. Yet, despite some occasional turbulence, Gaskell as a literary businesswoman cooperated well with her business partner, Smith, and overall managed to create a profitable product;

even the scandal with Lady Scott worked as a commercial trigger.

V. Long-Term Sales of Gaskell's Works

It is often argued that although the biography had many flaws in withholding the full truth, it posed many questions and contributed much to future studies of the Brontës and Gaskell herself as well. As mentioned before, Gaskell's keen interest in commercial side of the biography and her non-commercial commemoration of her friend were balanced by her acute sense as a businesswoman, and this section maintains that *The Life* therefore succeeded as a literary work that became a classic; looking at this phenomenon from a different angle, it could also be said that the biography turned out to be a long-selling merchandise. I will discuss the overall picture of contemporary praises and criticisms toward *The Life*, the influence it had on other biographers, and examples of its long-standing impact on current studies about them.

Firstly, the reactions toward *The Life* consisted of both positive and negative opinions, but the former prevailed. John Blackwood, in his letter to G. H. Lewes, criticized "execrable taste in the book ... I detest this bookmaking out of the remains of the dead" (qtd. in Haight 2: 322-23) or the business of "making money out of the dead" (qtd. in Haight 2: 330). Critics with negative opinions thus reckoned the biography to be a disrespectful gold-digger's attempt to excavate Charlotte's past, which should be kept in peace. On the other hand, George Eliot defended Gaskell from critics like Blackwood and claimed that both she and her partner Lewes thought that *The Life* was "admirable." By publishing *The Life*, Gaskell could celebrate Charlotte as a great authoress, and at the same time, she could prove her own genius (Peterson 69). The *Athenaeum* ("[W]e do not recollect a life of a woman by a woman so well executed" [qtd. in Easson 375]), the *Saturday Review* ("[H]er [Gaskell's] genius was wholly creative" [qtd. in Easson 378]), and the *Spectator* ("[I]t is impossible to read through Mrs. Gaskell's two volumes without a strong conviction that Charlotte Brontë was a woman as extraordinary by her characters as by her genius" [qtd. in Easson 379]) all gave opinions in favor of *The Life*.

Secondly, the influence of *The Life* on other biographers is uncalculatable at least in two ways in regard to female biographers dealing with women subjects. In other

words, Gaskell opened up a new corner in the literary market and a new model. The former refers to the fact that she became a source of motivation for other female writers and nurtured the next generations. Mary Cholmondeley, author of *Under One Roof: A Family Record* (1918), said she was encouraged by *The Life* discovering women writers from past generations in her aspiring days (Peterson 71). As for Charlotte Riddell's autobiographical fiction *A Struggle for Fame* (1883), the episodes are modelled on some chapters of *The Life*, but at the same time, Riddell was driven to explore beyond Gaskell's limitations on "two parallel currents" of the woman and the author (Peterson 71-72). The latter means that Gaskell established the method of dual portrayal of female subjects in biographies. As Juliette Atkinson claims, Gaskell spread the influential idea of "almost oxymoronic construct of the simultaneously eminent and obscure woman" (Atkinson 150). Atkinson gives a few examples of such self-fashioning; Anne Gilchrist, biographer of Mary Lamb, whom she pictures as both silent and opinionated, and Margaret Oliphant, who, in her autobiography, labelled herself both popular and obscure (Atkinson 154).

Thirdly, while so many studies on Charlotte, the main subject and Gaskell, the biographer, are indebted to *The Life* to this day, criticism of other Brontë sisters remains under the inescapable influence of the biography as well. For biographies on other Brontës, *The Life* became a key source of information. Here, the two cases of Emily Brontë's biographies will be discussed as a typical example. One is Winifred Gérin's *Emily Brontë: A Biography* (1971) and the other is Katherine Frank's *Emily Brontë: A Chainless Soul* (1992). Whereas the former pays faithful respect to *The Life*, the latter contrastingly challenges it in a subtle way. Gérin even used phrases by Gaskell in *The Life* for the title of her chapters. On the other hand, Frank is persistent in defying *The Life*, although she does not explicitly announce it. For instance, Frank begins her biography thus, "[w]e are so accustomed to thinking of the Brontë story as a Yorkshire saga, one permeated by 'The Spirit of the Moor', that we tend to forget that it actually began somewhere else" (20). This is an antithesis to the exoticized Haworth myth established by Gaskell, whose biography begins with the Haworth scenery and whose second volume attaches a vivid sketch of the bleak landscape. Frank continues to reveal that the Brontës originated

in Ireland, that their name used to be Brunty and that Patrick decided to appropriate to himself the noble sounding version of the last name to hide his lowly background. This information, however, does not appear in *The Life*. It is natural because there is no reason why Gaskell would reveal such details when she wanted to flatter her subject. Indeed, “books about the Brontës still find themselves standing within its shadow, often simultaneously using it as a source and offering resistance to the story it tells” (Jay ix). Thus, *The Life* continues to be the most monumental biography in the field that is sold, bought, read, and discussed in the field.

VI. Conclusion

Although many previous studies have neglected the commercial aspect of *The Life of Charlotte Brontë*, commercial success and risk-hedging were crucial to Gaskell as a professional writer, who was also a great investor in her private life. However, it was important for her to conceal that side of her character, because at the time, such mercenary considerations were widely regarded as inappropriate for women. Thus, she hid financial aspects of Charlotte’s career in the biography she wrote, forming a loose parallel between herself and Charlotte in terms of supposed lack of commercial interest. Despite its partial faults and inaccuracies, the biography was supposedly a success as a financial investment and a literary endeavor, both in a short-span and in the long run, for it was indebted to Gaskell’s sharp sense of balance of sensationalism and earnestness in her writing.

In conclusion, it was the silenced or marginalized parts about money in *The Life* that revealed the multi-layered complexity of Elizabeth Gaskell, Charlotte Brontë, their relationship, and the way in which the biographer chose to present her subject and herself to the public as female writers in the Victorian economy. Also, this produces to a new set of questions about gender, life-writing, and money-making. For example, oppression of women is a much debated topic in the Victorian era, men were also expected to conform to their gender role to some extent. How did the myth of masculinity shape biographies and autobiographies in terms of their financial aspects? In a biography about a male figure, do the reader find the male biographer’s self-projection and self-consciousness

in relation to money matters? Then, what happens when a man writes about a woman, or vice versa? And how have these things change over time? These inquiries, of course, require deeper investigations.

Notes

- 1 When not specified, the page numbers of *The Life* in this paper refer to the Penguin edition, which is based on the first edition text of the biography published by Smith, Elder & Co. The Oxford edition is sometimes used in this paper, and this edition is based on the third edition text of *The Life*.
- 2 Marnie Jones concludes that Gaskell made alterations at Smith's request to delete the slightly romantic nuance between Charlotte and Smith upon their first encounter to avoid unwanted gossip (285).

Works Cited

- Atkinson, Juliette. "‘Quiet and Uneventful’?: Female Literary Biography." *Victorian Biography Reconsidered: A Study of Nineteenth-Century ‘Hidden’ Lives*, Oxford UP, 2010, pp. 146-82.
- Barker, Juliet E. "The Brontë Portraits: a Mystery Solved." *Brontë Society Transactions*, vol. 20, no. 1, 1990, pp. 3-11.
- . *The Brontës*. Weidenfeld and Nicholson, 1995.
- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia, 1992.
- Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. Routledge, 1991.
- Frank, Katherine. *Emily Brontë: A Chainless Soul*. Penguin, 1992.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Edited by Elisabeth Jay, Penguin, 1997.
- . *The Life of Charlotte Brontë*. Edited by Angus Easson, Oxford UP, 1996.
- . *North and South*. Edited by Angus Easson, Oxford UP, 1998.
- . *The Letters of Mrs. Gaskell*. Edited by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, Mandolin-Manchester UP, 1997.
- . *Mary Barton*. Edited by MacDonald Daly, Penguin, 1996.

- Gérin, Winifred. *Emily Brontë: A Biography*. Oxford UP, 1971.
- Haight, Gordon S. *The George Eliot Letters*. Yale UP, 1954, 9 vols.
- Heilbrun, Carolyn. *Writing a Woman's Life*. Norton, 1988.
- Henry, Nancy. *Woman, Literature and Finance in Victorian Britain: Cultures of Investment*. Palgrave Macmillan, 2018.
- Jay, Elisabeth. "Introduction." *The Life of Charlotte Brontë*, edited by Elisabeth Jay, Penguin, 1997, pp. ix-xxxii.
- Jones, Marnie. "George Smith's Influence on *The Life of Charlotte Brontë*." *Brontë Society Transactions*, vol. 18, no. 4, 1984, pp. 279-85.
- Peterson, Linda H. "Elizabeth Gaskell's *The Life of Charlotte Brontë*." *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*, edited by Jill L. Matus, Cambridge UP, 2007, pp. 59-74.
- Robb, George. *Ladies of the Ticker: Women and Wall Street from the Gilded Age to the Great Depression*. U of Illinois P, 2017.
- Smith, George. *A Catalogue of New and Standard Works, Published by Smith, Elder and Co.* Smith, Elder, 1857.
- Uglow, Jennifer S. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber, 1999.
- Wise, T. J. and J. A. Symington. *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence*. Shakespeare Head P, 1932, 4 vols.

(Master's Student, The University of Tokyo)

ギヤスケルとアン・サッカレー・リッチー

矢次 綾

ギヤスケルは後輩作家によってどのように評価され、どのような影響を与えたのだろうか。本稿では、サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の長女で、20世紀の初頭以降、ほとんど読まれていないが、1860年代および70年代には人気作家だったアン・サッカレー・リッチー (Anne Thackeray Ritchie, 1837-1919) の場合について検討する。リッチーは1860年、23歳の誕生日の直前に、スラム街の子供たちの教育について考察したエッセイ「小さな学習者たち」(“Little Scholars”) が『コーンヒル』誌に掲載されたときに文壇デビューし、キャリアの前半は主にお伽話の再話や長短編小説、後半は先輩作家の伝記や作品の序章、文化人についての伝記的なエッセイや回想などを執筆している。目に付くのは英仏の女性作家に関するものであり、それらを統合すれば、17世紀以降の英仏における女性作家列伝と呼べそうなものが完成する。その中に、『ブラックスティック・ペーパーズ』(Blackstick Papers, 1908) に収録されたエッセイ「ギヤスケル夫人」、『クランフォード』(Cranford, 1851-53) の序文(1891)、『ポーチから』(From the Porch, 1913) 収録の「現在の女性作家についての講話」(“A Discourse on Modern Sibyls”) におけるギヤスケルに関する箇所がある。¹

本稿では、第一節で、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのリッチー評をもとに、彼女がギヤスケルを評価するに足る人物であることを検証し、第二節でギヤスケルがリッチーをどのように見ていたかを分析する。第三節で、リッチーが先輩女性作家についてどのような思いを抱き、その中でギヤスケルをどのように位置づけていたかについて吟味し、リッチーがギヤスケルのどのような点を評価したのか、どういった影響を受けているかについて解明する。

1 リッチーはどのように評価されているか

批評家もしくは文学史家としてのリッチーを評した文献を提示するのは困難だが、彼女の小説が公的もしくは私的に評されたものは容易に見つけることができ

る。例えばエリオット (George Eliot, 1819-80) が書簡の中で、リッチー初の長編小説『エリザベスの物語』 (*The Story of Elizabeth*, 1863) を「トロロプの作品ほど愉快ではないが、うまく書けています」と賞賛し (Eliot 4: 209)、別の書簡では、「(フィクションを読まないと決めている時期も) ミス・サッカレーの短編小説だけは例外です。彼女の作品が手元にあると、私は読みたい気持ちを抑えることができません」と記している (Eliot 6: 123)。ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) は「小説の技巧」 (“The Art of Fiction,” 1884) において、リッチーを天才 (a woman of genius) と呼び、かつて垣間見たものを小説の一場面として再現する彼女の描写力について、彼女自身から聞いた話を交えながら次のように記している。

[O]nce in Paris, as she ascended a staircase, [she] passed an open door where, in the household of a *pasteur*, some of the young Protestants were seated at table round a finished meal. The glimpse made a picture; it lasted only a moment, but that moment was experience. She had got her direct personal impression, and turned out her type. She knew what youth was, and what Protestantism; she also had the advantage of having seen what it was to be French, so that she converted these ideas into a concrete image and produced a reality. (172)

ジェイムズはリッチーの名前にも作品名にも言及していない。それでも、彼が彼女について述べていると考えられる理由は、厳格なカルヴィニストの祖母と共に幼少期をパリで過ごしたりッチーが (Jay 199)、親交を深めつつあったジェイムズに、² 当時の話をしても不思議ではないから、また、『エリザベスの物語』の中に、パリ在住の牧師の義父と同居し始めたばかりのヒロインが、牧師の被後見人の耳障りな足音を聞きながら階段を降りて食堂に入り、禁欲的で質素な食卓にげんなりする様子が次のように描かれているからである。

There was a small table-cloth, streaked with blue, and not over clean, bunches of bread by every place, and iron knives and forks. Each person said grace to himself as he came and took his plate. Only Elizabeth flung herself down in a chair, looked at

the soup, made a face, and sent it away untasted.

“Elizabeth, ma fille, vous ne mangez pas,” said M. Tourneur, kindly.

“I can’t swallow it!” said Elizabeth.

“When there are so many poor people starving in the streets, you do not, I suppose, expect us to sympathize with such pampered fancies?” said the prim lady.
(19-20)

リッチーは祖母と過ごした 1830 年代の終わりから 40 年代にかけてのパリを『エリザベスの物語』で再現していると、ジェランも指摘している (Gérin 16)。

リッチーの妹ミニー (Harriet Marian Thackeray Stephen, 1840-75) の夫、レズリー・スティーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) は、リッチーの天分を認めながらも、その欠点を鋭く指摘している。彼は後に再婚するジュリア (Julia Duckworth, 1846-95) への書簡の中で、リッチーを「悪いヴァイオリンしか持たない超一流の演奏家」や「絵具や筆か何かが混乱しているため、輪郭がぼやけていてはつきりしない才能ある画家」に喩え、³ リッチー作品には、構成や一貫性において問題があるという認識を示している。スティーヴンとジュリアの娘で、リッチーの姪にあたるヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、リッチーが 81 歳で他界した約一週間後の 1919 年 3 月 6 日発行の『タイムズ・リタラリー・サプルメント』に追悼文「レディ・リッチー」を寄稿し、その時点で既に忘れ去られた作家だったリッチーについて次のように述べている。

The death of Lady Ritchie will lead many people to ask themselves what she has written, or at least which of her books they have read; for she was never, or perhaps only as Miss Thackeray for a few years in the ‘sixties and ‘seventies of the last century, a popular writer. And, unless we are mistaken, they will find themselves, on taking down ‘The Story of Elizabeth’ or ‘Old Kensington,’ faced with one of those curious problems which are more fruitful and more interesting than the questions which admit of only one answer. The first impression of such a reader will be one of surprise, and then, as he reads on, one of growing perplexity. How is it possible, he will ask, that a writer capable of such wit, such fantasy, marked by such a distinct

and delightful personality, is not at least as famous as Mrs. Gaskell, or as popular as Anthony Trollope? (Woolf 279)

続けてウルフは、リッチー作品が読まれなくなった要因が、読者に意識の転換をもたらすほどのインパクトに欠けるという作品そのものの問題というよりも、読者の意識の変化にあると記し、長編小説『懐かしのケンジントン』(*Old Kensington*, 1873) に特に注意を払いながら、時代の雰囲気や精神、特定の土地や人々の様子を描出するリッチーの力を高く評価している (281-83)。

批評家もしくは文学史家として力量がリッチーにあることを示唆した例として、誰がサッカー伝を書くかという、その死の直後からたびたび持ち上がっていた懸案が1875年に再燃したとき、リッチーが書くべきだとジェイムズが公然と主張したことが挙げられる。⁴ その数年後、オリファント (Margaret Oliphant, 1828-97) がブラックウッド社版「英国の読者のための海外古典」シリーズの编者として、リッチーの力量ではなく、サッカーの娘というネーム・ヴァリューを見込んで『セヴィニエ侯爵夫人』(*Madame de Sévigné*, 1881) の執筆を依頼したように (Colby 261-62, n. 43)、ジェイムズもリッチーの立場を考え、そのように主張した可能性はある。しかしながら、仮にそうであっても、リッチーの小説家としての才能を高く評価した彼が、サッカーの娘であるという理由だけでそう主張したとは考えにくい。

リッチーには文筆家としての力量があることを証明するかのようになり、『セヴィニエ侯爵夫人』は好評を博し (Gérin 197-200)、続けてリッチーは、『女性作家読本——ミセス・バーボールド、ミセス・オーピー、ミス・エッジワース、ミス・オースティン』(*A Book of Sibyls: Mrs. Barbauld, Mrs. Opie, Miss Edgeworth, Miss Austen*, 1883) など、女性作家についての伝記的な内容を含む多くの著作を生み出した。その文章に、ステイヴンが小説について指摘したような構成や一貫性における問題点が見いだされるとしても、先輩作家の作品や人生に関するリッチーの目の付け所の的確さや、描写力が読者を惹きつけたのであろう。リッチーが文学的な審美眼の持ち主だった証拠として、彼女がオースティンをいち早く評価し、エッセイ「ジェイン・オースティン」(“Jane Austen,” 1873) を書いたことが挙げられるだろう。このエッセイは、オースティンの『批評と評価』

(*Critical Assessments*) 第一巻に、「19世紀における反応」(“The Nineteenth-Century Response”)の一つとして掲載されている。⁵ 以上より、リッチーには、ギヤスケルを評価する資格があると考えられる。

2 ギヤスケルから見たリッチー

ギヤスケルが作家としてのリッチーに注目していた形跡は、伝記や書簡を読んだ限りで見当たらない。ギヤスケルにとってのリッチーは、サッカレーの娘、もしくは、リッチーと同年に生まれた次女のミータ (Margaret Emily Gaskell, 1837-1913) の友人以外の何者でもなかったと推測される。リッチーのデビュー作「小さな学習者たち」は、『コーンヒル』誌上の他の多くの著作と同様に匿名で掲載されたが、サッカレーが「うちのぼちゃぼちゃのアニー」の作品だと書簡等を通して友人たちに吹聴したために匿名性が保たれず (Gérin 119)、ジョージ・スミス (George Murray Smith, 1824-1901) と親しかったギヤスケルの耳にも、その情報は届いていたはずである。その後リッチーは、ギヤスケルが亡くなる 1865 年までに、数編のエッセイを『コーンヒル』誌に寄稿し、1863 年には『エリザベスの物語』を同誌に連載して、既述した通り、例えばエリオットやジェイムズによって高く評価されている。一方、ギヤスケルがリッチーに言及したものとして現在出版されているのは、ミータとの友人関係について述べた書簡 (*Letters* 412, 442) と、サッカレーが 1863 年に急死してから約一週間後、20 代半ばだったリッチーとその妹のミニーの今後についての懸念を表現した、ジョージ・スミス宛の書簡 (*Letters* 545) のみである。

ギヤスケルがリッチーとミニーの今後を懸念したのは、サッカレーの妻イザベラ (Isabella Gethin Thackeray, née Shawe, 1816-93) が統合失調症 (Schizophrenia) であり (*Thackeray's* 25)、介護者に預けられているという公然の秘密を知っていたためであろう。その症状はミニー出産後に現れ、3 歳だったリッチーをマーゲートの海岸で溺死させかけたことで、イザベラは母親としての役目を果たせないと判定された (Gérin 9-10)。以降、リッチーは 9 歳になるまで、パリ在住のサッカレーの実母にミニーと共に預けられる。それと同時にリッチーは、サッカレーの知人だったエリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning, 1806-61)、ジェイン・カーライル (Jane Welsh Carlyle, 1801-66)、ジュリア・

マーガレット・キャメロン (Julia Margaret Cameron, 1815-79) たちから、母親的な愛情を注がれる (MacKay 57)。ギヤスケルは 1850 年頃にサッカーと知り合い、心を許せる相手だと思っていたが、家族ぐるみで交流するようになる (Uglow 460)。ギヤスケルとサッカー姉妹が他の文人共々ハムステッドのジョージ・スミス邸に夕食に招かれたこともある。その席で隣り合わせたミニーとステイーヴンの様子を見たギヤスケルが、二人は結婚するのではないかと予言したことを、ステイーヴン自身が書き留めている (Stephen 9)。ただし、リッチーがギヤスケルと共に過ごした折のことを回想するとき、彼女が記しているのは、そのようなエピソードや、ギヤスケルの母親的な優しさといった人柄ではなく、ストーリーテリングの巧みさや、言葉の端々に現れる機知やユーモアといった小説家としての資質に直結する特徴である。十代半ばで筆耕者として父の仕事を手伝い始め、既に小説を書き始めていたリッチーにとって (Gérin 118)、ギヤスケルは、友人の母親、もしくは、母親代わりとして慕う存在というよりも、尊敬する先輩作家であり、その一挙一動を注意深く観察していたのであろう。バレット・ブラウニングも言うまでもなく先輩作家であり、リッチーは『英国偉人事典』(*The Dictionary of National Biography*) 初版 (1885) のバレット・ブラウニングの項を担当しているが、回想録的なエッセイに記しているのは、その母親的 (motherly) で立派な人柄であり (*Records* 160, 190)、文人としての側面ではない。それは、彼女と交流していたとき、リッチーがまだ 9 歳以下の子供だったためであろう。

3 リッチーによる女性の作家列伝におけるギヤスケルの位置とリッチーが享受した影響

リッチーは自分のペルソナをミス・ウィリアムソン (Williamson) と呼び、父ウィリアムから「書く」という男の仕事を引き継いだ娘としての自覚を表現する一方、女性が紡いできた文学の伝統の継承者としての自覚も持っていた。その証拠に、リッチーは、ミス・ウィリアムソンとその友人の未亡人が知り合いの若いお嬢さんについてお喋りをしているという外枠の中で、「眠り姫」などのお伽話を再話している。リッチー自身が、ドーナワ伯爵夫人 (Marie-Catherine Le Jumel de Barneville, later Baroness d'Aulnoy and Countess d'Aulnoy, 1650/51-1705) のお伽話集の序文で述べているように (ix)、お伽話の再話は有名無名の女性たちがフ

ランスのサロンで伝統的に行ってきたことだった。リッチーはパリのサロンをロンドンの中産階級の居間に置き換え、サロンに集う女性たちと同じことを自分のペルソナとその友人に行わせた。そうすることを通して、リッチーは、女性たちが紡いできた文学の伝統を自分が継承しているという自覚を表現しているのである。リッチーがそのような自覚を持っていたことと、英仏の先輩女性作家についての伝記やエッセイを著し、17世紀以来の英仏の女性作家列伝を結果的に作り上げたことは、無関係ではないだろう。先輩女性作家について書き記すこともまた、女性がどのようにして文学の伝統を紡いできたかを再現し、その様子を後世に伝える行為に他ならないからである。

リッチーがギヤスケルについて記した出版物は、既述したように、『クラフフォード』の序文、「ギヤスケル夫人」、「現在の女性作家についての講話」の3編である。その中でも、ギヤスケルがリッチーにとってどのような存在であるかが端的に述べられているのは、ヴィクトリア朝の女性作家たちがどのような活躍をしたのかを概観した「講話」である。リッチーによれば、シャーロット・ブロンテ、エリオット、オリファント、ギヤスケルは「自分が若い頃に有名だった4人の女性作家たち」という点で共通しているが、ブロンテとエリオットが「魔法使い」(magician)である一方で、ギヤスケルとオリファントは「啓蒙者」(torch-bearer)だった(“Discourse” 6)。ブロンテを「魔法使い」と呼ぶ理由は、文学界に強い影響を及ぼしただけではなく、1846年にジョージ・スミスと共にサッカー家を訪れ、少女だったリッチーを、ジェイン・エアという物語の主人公が目の前に現れたような気分させてくれた(Thackeray’s 57)ためである。エリオットを「魔法使い」と呼ぶ理由は直接的に述べられていないが、その小説家としての技法について、リッチーがギヤスケルやオリファントと比較しながら述べている箇所から推測することができる。

George Eliot and Mrs. Oliphant seem to be Rulers in their different kingdoms of fancy; George Eliot watching her characters from afar, Mrs. Oliphant in a like way describing but never seeming subject to, the thronging companies she evokes. Mrs. Gaskell, on the contrary, became the people she wrote about. When she wrote of Charlotte Brontë, for instance, she saw with her eyes and imbibed her impressions.

In the same way in her stories she seems inspired by each character in turn, whether it is Molly Gibson or her stepmother, or Miss Matty and Miss Deborah, or shall we instance Philip Hepburn in *Sylvia's Lovers*, walking along the downs in the darkness, looking towards the lights in the distant valley and listening to the clang of the New Year bells? ("Discourse" 13)

同様の分析は「ギヤスケル夫人」でもなされており、小説世界の「支配者」であるかのようなエリオットとオリファントは『テンペスト』のプロスペローに喩えられている ("Gaskell" 217)。要するに、リッチーの視点に立てば、ギヤスケルが人物の目で小説世界を見て描写しているのに対し、人物との間に一定の距離を取り客観的に描写するエリオットとオリファントの技法は「魔法」なのである。リッチーが「講話」の中でオリファントを「魔法使い」ではなく「啓蒙者」と呼んでいる理由は、彼女が『セヴィニエ侯爵夫人』の執筆を依頼することによって伝記作家としての道を開いてくれたという敬意と感謝を抱いていたためであろう。

ギヤスケルが「登場人物になる」 ("Gaskell" 218) ことによって「生き生きとした描写」(217) を成し遂げることができる根底には、生来のストーリーテラーとしての才能があると、リッチーは推察している。彼女がギヤスケルのその才能に感服したのは、ジョージ・スミス邸で、ギヤスケルがスコットランドに伝わるゴースト・ストーリーを語るのに耳を傾けたときだった。『クランフォード』の序文の中で、リッチーはその折のことを回想している。

"I believe the art of telling a story is born with some people," writes the author of *Cranford*; it was certainly born with Mrs. Gaskell. My sister and I were once under the same roof with her in the house of our friends Mr. and Mrs. George Smith, and the remembrance of *her voice* comes back to me, harmoniously flowing on and on, with spirit and intention, and delightful emphasis, as we all sat indoors and gusty morning listening to her ghost stories. They were Scotch ghosts, historical ghosts, spirited ghosts, with faded uniforms and nice old powered queues. (ix)

リッチーは「ギヤスケル夫人」でもそのときのことに触れ、ギヤスケルが「登場人物になった」例として、『シルヴィアの恋人たち』(Sylvia's Lovers, 1863)の中でヒロインの父親が幽霊話をする場面を挙げている("Gaskell" 213)。すなわち、リッチーは、この場面でギヤスケルがヒロインの父親の口を借りてストーリーテリングをしていると考えているのである。

作者が「登場人物になり」、人物の目で見、人物の口を借りて語る様子はリッチーの小説にも見られる。本稿第一節において、ジェイムズがリッチーの天分を認める証拠として挙げている『エリザベスの物語』の一場面を引用したが、この場面でリッチーはヒロインの目と耳を通して、プロテスタントの禁欲主義的な生活態度を見聞し、げんなりしている。パリで過ごした幼少時代、カルヴィニストの祖母の厳格な教育に反発していたリッチー (Jay 199) が、ヒロインについて叙述しながら、当時を追体験していると解釈することもできるが、いずれにしても、リッチーはギヤスケルに倣い、登場人物と一体化している。このような自分と作品、もしくは作中人物との関係についても、リッチーはミス・ウィリアムソンというペルソナを通して表現している。すなわち、リッチーはミス・ウィリアムソンの口を借りてお伽話を再話するだけでなく、彼女を作品内に登場させ、人物たちと交流させている。長短編の小説においても同様である。例えば『エリザベスの物語』第12章に、メアリという名前の老齢期の人物がヒロインのゴッドマザー的な人物の友人として登場し、自分がこの小説の語り手であることを読者に明かしている。メアリはミス・ウィリアムソンのファーストネームであり、リッチーは彼女の目を通して小説世界を見ながら、ヒロインの様子を叙述してきたことを示唆しているのである。

要するに、リッチーにとってギヤスケルは、友人ミータの母親というよりも、その一挙一動を観察せずにはいられない偉大な先輩作家であり、「登場人物になって」語るという手法を、作品を通して自分に教え示してくれた「啓蒙者」だった。そういったギヤスケルに対する尊敬と感謝の念を、リッチーが後年に記した『クランフォード』の序文や、エッセイ、講演のための原稿から読み取ることができるのである。

注

本稿は日本ギヤスケル協会第30回例会（2018年6月2日、於岡山国際交流センター）での研究発表に加筆修正を施したものである。本稿は、2018（平成30）年度松山大学特別研究助成の研究成果として執筆したものである。

- 1 “Sybil”は、女性作家を指すリッチーの用語である。*A Book of Sibyls: Mrs. Barbauld, Mrs. Opie, Miss Edgeworth, Miss Austen* (1883)のタイトルについて考えていたとき、リッチーは荒野を通りながら『マクベス』の魔女が登場する場面を連想し、女性作家はみんな魔女なのではないかと思ったことに由来する。このことについてジョージ・スミスに告げた書簡をマッケイが引用している (MacKay 74)。
- 2 リッチーと実際に会ったばかりの1878年、妹 (Alice James, 1848-92)宛の書簡の中で、ジェイムズはリッチーを“the very foolishest talker (as well as most perfectly amiable, and plainest, woman) I have lately encountered” (James, *Letters* 157)と呼んでいるが、2人は親交を深め、生涯の友になった (Gérin 285, Aplin 33)。
- 3 スティーヴンがリッチーをこのように評した1877年の書簡を、アラン・ベルが引用している (Bell xxiii)。
- 4 この案件は、サッカー全集 (*Thackerayana*) が1875年に発行されたことをきっかけに再燃した (Aplin 119)。
- 5 『批評と評価』において「ジェイン・オースティン」の作者のファーストネームは“Anna”と綴られているが、そこに掲載されているのは明らかにリッチーのエッセイである。

引用文献

- Aplin, John. *Memory and Legacy: A Thackeray Family Biography, 1876-1919*. Cambridge: Lutterworth, 2011.
- Bell, Alan. “Introduction.” *Sir Leslie Stephen’s Mausoleum Book*. Oxford: Clarendon, 1977. ix-xxxiii.
- Colby, Vineta and Robert A. *The Equivocal Virtue: Mrs. Oliphant and the Victorian Literary Market Place*. Hamden, Conn.: Archon, 1966.
- Eliot, George. *The George Eliot Letters*. 9 Vols. Ed. Gordon S. Haight. New Haven: Yale UP, 1954.
- Gaskell, Elizabeth. *The Letters of Elizabeth Gaskell*. Ed. John A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Mandolin-Manchester UP, 1997.

- Gérin, Winifred. *Anne Thackeray Ritchie: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1981.
- James, Henry. "The Art of Fiction." 1884. *The Art of Criticism: Henry James on the Theory and the Practice of Fiction*. Ed. William Veeder and Susan M. Griffin. Chicago: U of Chicago P, 1986. 165-83.
- . *Henry James Letters*. 4 Vols. Ed. Leon Edel. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975.
- Jay, Elisabeth. "In Her Father's Steps She Trod': Anne Thackeray Ritchie Imagining Paris." *The Yearbook of English Studies* 36. 2 (2006): 197-211.
- MacKay, Carol Hanbery. *Creative Negativity: Four Victorian Exemplars of the Female Quest*. Stanford: Stanford UP, 2001.
- Ritchie, Anne Thackeray. "Discourse." *From the Porch*. London: Smith, Elder, 1913. 3-30.
- . "Introduction." *The Fairy Tales of Madame D'Aulnoy*. Trans. Miss A. Macdonell and Miss Lee. London: Lawrence and Bullen, 1892.
- . "Mrs. Gaskell." *Blackstick Papers*. London: Smith, Elder, 1908. 209-32.
- . "Preface." *Cranford*. London: Macmillan, 1898.
- . *Records of Tennyson, Ruskin and Browning*. London: Macmillan, 1892.
- . *The Story of Elizabeth with other Tales and Sketches*. Boston: Fields, Osgood, 1869.
- . *Thackeray's Daughter: Some Recollections of Anne Thackeray Ritchie*. Ed. Hester Fuller Thackeray and Violet Hammersley. Dublin: Euphorion, 1952.
- Stephen, Leslie. *Sir Leslie Stephen's Mausoleum Book*. Ed. Alan Bell. Oxford: Clarendon, 1977.
- Uglov, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Woolf, Virginia. "Lady Ritchie." *The Times Literary Supplement* (6 March 1919). Reprinted in Winifred Gérin, *Anne Thackeray Ritchie: A Biography* (Oxford: Oxford UP, 1981), 278-83.

(松山大学教授)

Elizabeth Gaskell and Anne Thackeray Ritchie

Aya YATSUGI

How was Elizabeth Gaskell evaluated in her own time and what influence did she have on younger novelists? To present answers to these questions, this essay focuses on Anne Thackeray Ritchie, William Thackeray's eldest daughter and a novelist, biographer and essayist who was quite popular in Victorian England, although her work has been neglected since the beginning of the 20th century. First, Ritchie's capability to appreciate other novelists and their novels is examined by considering how she herself was evaluated as a novelist and biographer by her contemporaries, including Henry James. Next, attention is turned to the personal relationship between these two women writers. It is discovered that, while Gaskell regarded Ritchie as a friend of her eldest daughter rather than as a writer, Ritchie appreciated Gaskell's gifts as a storyteller and regarded Gaskell highly as one of her predecessors. Her appreciation of Gaskell is further investigated through Ritchie's essay "Mrs. Gaskell," her preface to *Cranford*, and her lecture "A Discourse on Modern Sibyls." ("Sybil" is Ritchie's term for women writers.)

In "A Discourse on Modern Sibyls," Ritchie situated Gaskell among the four most famous women writers of her youth and, calling her a "torch-bearer," pointed out those features setting her apart from the other three, i.e., Charlotte Brontë, George Eliot and Margaret Oliphant. Gaskell, according to Ritchie, characteristically became "the people she wrote about" and, by seeing the world in her novels through the eyes of her characters and talking with their mouths, created strikingly realistic descriptions. Gaskell, for example, told ghost stories in the words of the heroine's father in *Sylvia's Lovers*, just as she herself had actually done, for example, in 1862 at the house of George Smith, the publisher of *The Cornhill*. Interestingly, a similar narrative feature is seen in Ritchie's works such as *The Story of Elizabeth*. From this, it can be concluded that Ritchie most appreciated Gaskell's way of empathizing with her characters and adopting their perspectives in her works.

Fariha Shaikh,
Nineteenth-Century Settler Emigration
in British Literature and Art

(Edinburgh Critical Studies in Victorian Culture)

Edinburgh University Press, 2018, 256pp.

Paperback £75.00, ISBN: 9-781474-433693

加藤 匠

一見したところこれといった特徴がないように見える文章の背後から、当時の歴史や文化が垣間見えるということは決して珍しいことではない。本書の第五章「移民をめぐる美学」でファリハ・シャイクがその一例として挙げたのは、『メアリ・バートン』からの次のような文章である。

私には、広くて空間に余裕のある、細長く低い木造の家が見える。その周囲は何マイルにもわたって太古の木々が切り倒され、一本だけ残った木がこの家の切り妻壁に影を落としている。家の周りには庭があり、そのずっと先の所には果樹園だってある。小春日和の壮観があらゆる場所に広がっており、その素晴らしい風景を見た人々の心を躍らせるのだ。

その家の戸口に立ち、町の方に目をやりながら、メアリは一日の仕事を終えて帰ってくる夫の帰りを待ちわびている。彼女はそちらをじっと見ながら、笑顔で耳を澄ましている。……

「イギリスから手紙が来たよ！そのせいでこんなに遅くなったんだ！」

かつてレイモンド・ウィリアムズは『メアリ・バートン』におけるカナダへの移民という結末に対し、自ら提起した問題に対して解決策を提示できなかったことの表れであると批判したが、そもそもギヤスケルは何故このような結末を用意したのだろうか。そこには当然、ギヤスケルがこうした結末を構想することを可能にした何らかのコンテキストが存在したはずである。本書を通じてシャイクがわ

れわれギヤスケル研究者に与えてくれる最も有益なものは、まさにこうした移民をめぐる歴史的コンテクストということになるだろう。

シャイクが本書で注目したのは、ヴィクトリア朝期にカナダやオーストラリア、ニュージーランド等への移民をめぐって、様々なテキストが生産されていたという事実であった。彼女は第一章「印刷された移民たちの手紙」で、ジェムが受け取った手紙に象徴されるような、移民たちが続けていた本国との手紙を通じた交流と、それに端を発する情報の拡散のあり方に注目する。1833年にサセックス州ミッドハーストからアッパーカナダのアデレイドに移民したフレデリック・ヘイステッドが書いた手紙はその一例である。行商人だった彼は1830年代に起きた不景気の影響で事業の継続が困難となり、娘と共に労働者として再出発を図ろうとアッパーカナダに渡ったのだが、その後も故国の友人たちに熱心に手紙を送り、移民先の状況や将来の展望を報告するだけでなく、後に続く移民たちには支援を惜しまないことを強調していた。これらの手紙はサセックス州で移民計画の取りまとめをしていたトマス・ソケットにより、他の移民による手紙と合わせて、パンフレットとして刊行された。移民の生活をめぐる言説が雑誌や新聞の記事やパンフレットといった形で広く展開されたことに加え、移民事業を行っていた人々は、地元の掲示板に移民計画や出航予定を派手に貼り出し、移民のガイドブックやマニュアルを刊行するなど、移民をめぐる情報は広く拡散していた。

ただ移民計画に深く関与していたソケットのような人物が熱心に移民先の情報を拡散していたことを踏まえるならば、その信頼性に対する疑義が生じたのは自明のことであろう。第五章で取り上げられる『マーティン・チャズルウィット』が、移民を扱った作品に頻繁に登場する狡猾な不動産会社、嘘をつく代理人、移民先の状況を正確に伝ええない地図といった要素を用いて、移民をめぐる情報の信頼性に対する疑義を描き出していたように、シャイクは本書のいくつかの章を通じて、移民をめぐる表象に疑義を突きつけたものについて論じている。

第三章「断片からなる美学」で論じられるのは、もともとイギリスで作家として活躍しながらも、夫の希望で否応なくカナダに移住することになったスザンナ・ムーディとキャサリン・パー・トレイルという姉妹の作品である。シャイクが特に注目したのは、現在は共にカナダ文学の古典として評価されている、ムーディ

の『未開の地で不便を忍んで』とトレイルの『カナダという未開の地』という、当時広く流通していた移民を奨励する作品が女性たちの移民体験を正確に描いていないことに違和感を抱いた二人が、自身の移民体験を反映させて描いたふたつの作品であった。これらの作品について、従来の文学作品に象徴される男性的なマクロの視点ではなく、女性的なミクロの視点からの物語であり、植民地の成功の鍵を握っているのは、子どもを産み、移民に相応しい態度を彼らに伝える母親とされていることをシャイクは指摘する。

さらに姉妹の作品では、人々にカナダへの移民を説いて奔走する人物は、カナダに人々が移民する度にボーナスを得られる契約を結んだ、移民を推進する組織の代理人とされ、彼が謳っていた理想像と現実との落差が強調されることとなる。シャイクは姉妹の作品を、移民を推進した作品が歪曲していた事実を正そうとするものとして位置づけ直しており、彼女たちは移民当初の苦勞を描き出すことで読者の認識を高め、より良い移民生活に向けた備えをすることの意義を説いているとするのである。またカナダに移民をしたことによって生まれた、イギリスでは接する機会がなかった労働者階級の人々や黒人、アメリカン・インディアンといった人々との交流も姉妹の作品には書きこまれ、姉妹が人種や階級といった従来の枠組みを超えた生活を送っていたこともシャイクは指摘する。

更に、拡散していた植民地表象に疑義を投げかけたとされるのが、第四章「移民を描いた絵画」で論じられる、移民をめぐって描かれた風俗画である。シャイクが取り上げたのは、フォード・マドックス・フォードの『最後のイングランド』、リチャード・レッドグレイヴの『移民たちが最後に見た故郷』、トマス・ウェブスターの『植民地からの手紙』、ジェームズ・コリンソンの『移民からの手紙に返信する』といった作品だ。シャイクは、1830年から1870年にかけて移民を題材とした絵画が三百点以上制作されたという事実を紹介したうえで、移民を推奨する文学作品には描かれることがなかった、彼らが移民せざるを得ない状況を作り出したイギリスに対する苛立ちをはじめ、悲しみや喪失感、絶望といった様々な感情を表現する場として風俗画が機能したことを指摘する。

その際にシャイクが自身の議論の軸とするのが、マーティン・マイゼルの議論を踏まえた、＜19世紀において、小説と絵画と芝居はいずれも視覚的要素と物語とを兼ね備えていたという点で、複雑に絡み合う存在だった＞という認識であ

る。実際ブラウンとレッドグレイヴの作品には解釈を規定する機能を持つ詩が数行に亘って添えられ、状況によって移民せざるを得なくなった家族の姿が前景化され、彼らをそうした状況へと追い詰めたイギリスへの批判が感じられるように意図されているし、移民からの手紙を家族に届ける郵便配達人が描かれたウェブスターの風俗画には、宛名の筆跡から手紙の送り主を知った家族が手紙を開封する前の緊迫感あふれる場面が描かれている。またコリンソンの作品にも、移民からの手紙が開封されるなか、父親が移民先の地図を広げ、子どもが手紙の返事を書いている場面が描かれているが、一度手紙を書く手を止めて妻を見つめる夫とそれに応える妻の不安げな視線からは様々なドラマが感じられるだろう。移民を描いた風俗画には、移民することで二度と故郷を見ることが出来なくなるかもしれない辛さや将来への不安といった要素が描き込まれており、移民を後押しし、移民先を楽園として提示するパンフレットや文学作品とは一線を画すものであったとシャイクは指摘する。

また本書の中でも特に興味深いのが、第二章「移民たちが船上で刊行した新聞」で扱われる、船内だけで流通していた手書きの新聞について一次資料を駆使して論じた箇所であろう。シャイクが取り上げるのは、1839年にシドニーに向かう途上にあるアルフレッド号の船内で毎週土曜日に12回に亘って刊行された『アルフレッド』と1868年にトゥルー・ブリトン号という別の船で刊行されていた『オープン・シー』である。シャイクは現存するこれらの原稿を参照しながら、多様な出自を持つ移民たちの意識を変えて一体感を持たせ、移民後の生活のあり方について学ぶ準備期間として航海を位置づけ直そうと試みる。

『アルフレッド』と『オープン・シー』の共通点としてシャイクが指摘するのが、自らを移住先に向かって航海している共同体としてではなく、陸地に存在する共同体として規定している点である。こうした比喩を通じて、移民たちは船のある種の故郷と感じるようになり、共に乗船している他の移民たちを共同体の仲間として認識するものとされている。船上では規律が厳しく管理されており、そうした環境下で新聞を作るという共同作業が移民たちの距離を縮め、喧嘩や窃盗などの問題を予防する効果もあったとするのである。また『アルフレッド』は自身の船室を持つ人々が中心となって作成され、下級船客を排除する性格を持っていたものの、『オープン・シー』では下級船客にも船内の図書室を開放した記事

が掲載されるなど、より開放的性格を持っていたことも指摘されている。当時の船内で見られた、階級差をどう扱うかをめぐる差異がこの二つの新聞が体現する形となっているのだ。一方、『アルフレッド』はエミリーと二歳年下のイライザのダーヴァル姉妹が揃って寄稿するなど女性にも開かれていたが、『オープン・シー』はその寄稿者の大半が男性であるという違いも見られ、船内におけるイデオロギーが新聞に反映される傾向があることが窺える。ここには、不安や絶望感を抱えるだけでなく、故郷を離れて意気消沈したという、風俗画で描かれた移民像からは大きく乖離した移民たちの姿が確かに見られるのだ。

このような形で本書の内容を概観するなかで、冒頭で投げ掛けた「ギヤスケルは何故カナダへの移民という結末を用意したのだろうか」という問いに対する答えが見えてきたはずである。ギヤスケルはカナダを実際に訪れた経験はなく、こうした光景を実際に目にしていたわけではなかったが、シャイクによれば、ギヤスケルが描き出した、小春日和に照らされ、ジェムやメアリにマンチェスターでは手に入れることが出来なかった、安らぎや安定を与えてくれたカナダの光景は、当時支配的であった〈仕事や食料が豊富で、信頼に値する共同体も存在する〉という、カナダでの移民生活を賛美する言説を踏まえたものだったのだ。シャイクが具体的に論じていないのが惜しまれるが、後にギヤスケルが作品を連載することになる『ハウスホールド・ワーズ』誌をはじめとする様々な雑誌に、移民たちによる手紙が定期的に掲載されるだけでなく、移民をめぐる政策の変更が報じられたり、移民が登場する記事が掲載されていたりしていたことからすれば、ギヤスケルはこうした情報に容易に触れることが可能だった。『メアリ・バートン』や『デヴィッド・コパフィールド』に見られる移民という行為は、複雑化したプロットを締めくくったり、通常の枠組みでは処理しきれない登場人物を処理したりするための都合の良い手段ではなかったのである。

こうした新たな示唆を与えてくれる本書ではあるものの、歴史的なコンテクストを扱った章と比較すると、ヴィクトリア朝期の文学作品について論じた第五章には不満を感じざるを得ない。いくつか例を挙げてみよう。移民とヴィクトリア朝文学との関連を論じたダイアナ・アーチボルドの『ヴィクトリア朝小説における家庭生活、帝国主義、移民』が指摘したように、『メアリ・バートン』とは対照的な、もはや楽園ではなくなったカナダが登場する「従妹フィリス」について、

シャイクは論じていない。近代化を象徴する鉄道工事の責任者になるためにカナダに渡ったホールズワースは現地女性との結婚をフィリス達に伝えるための手段として手紙を用いており、シャイクの議論を補完できたはずだ。またシャイクはナンシー・メッツによる『『マーティン・チャズルウィット』は読者にとって、擬似的なガイドブックであった』という解釈を否定し、ディケンズのアメリカに対する嫌悪感という歴史的コンテクストを考慮していない解釈と批判しているが、『マーティン・チャズルウィット』には作者ディケンズの意図とは関係なく、そのように解釈しうる要素があるということは否定できまい。植民地生活に関するトレイルによるガイドブックについて触れていることを踏まえるならば、そうした可能性も当然視野に入ったはずである。更にこの章でシャイクはディケンズ、ギャスケルに加え、14歳の時にスコットランドから南オーストラリアに移住し、当地での生活を描写するなかで、移民を経験した女性や子どもに温かい目を向けたことから近年になり注目されているキャサリン・ヘレン・スペンスについても論じているが、それぞれの作家について数頁ずつ論じただけに留まり、十分に論じているとは言いがたい。特にスペンスについてならば、ジャネット・マイヤーズ『対蹠地にあるイングランド』や論集『ヴィクトリア朝期の入植者のナラティブ』といった先行研究からの方が、より多くの示唆を得ることができだろう。

とは言え、多くの一次資料を駆使して、時間の流れの中で埋もれてしまった歴史のコンテクストを掘り返した本書の価値が減ずることはない。その意味では、近年いくつもの研究書が刊行されつつあるヴィクトリア朝期の移民をめぐる議論に間違いなく貢献するものと言えよう。本書はエディンバラ大学出版局によるヴィクトリア朝文化研究のシリーズの一環として刊行されているのだが、「学際的アプローチによって相互の研究分野を持続的により豊かなものとし、ヴィクトリア朝期の文学、文化、歴史やアイデンティティに対する多くの見直しを常時提示していく」(x)という言葉に違わない、まさに労作である。

(明治大学商学部兼任講師)

Margriet Schippers,
Elizabeth Gaskell, Citizen of the World:
Civic Lessons

Pallas Publications, Imprint of Amsterdam University Press, 2017, 179pp.
Paperback €34,95, ISBN: 9-789085-551133

太田 裕子

本書はマルグリート・シッパーズ氏の英国レスター大学での博士論文の刊行書であり、ギヤスケルの作品の中でとりわけ短篇を網羅しつつ、18世紀の英国非国教会派ユニテリアン理性論者たちの思想をギヤスケルがどのように作品やその掲載誌、形式の選択などに生かしていったのかを、近代のより良き「市民」形成という目的の観点から論じ、ギヤスケルの執筆の総合的背景を考察している。

これまで18世紀から19世紀にかけてのユニテリアン作家のネットワークの研究は1990年代以降キャサリン・グリードルやルース・ワッツら社会歴史学者により女性の社会的権利の獲得への関与の面から論じられ、以降ステファニー・マルコビッツやジュリア・サンジュー・リーを始めギヤスケルの革新性が論じられたが、その中でも短篇と非国教会派の思想との包括的関連付けをした論文は少ない。またジェニー・ユングロウやポーリン・ネスターらが、英米のユニテリアンサークルが慈善、文学、哲学等のネットワークを形成していたことを指摘する中、フェリシティー・ジェイムズやダニエル・ホワイトらは18世紀ユニテリアン詩人アナ・バーボルドやハリエット・マルティノーらの社会改革のための文学の戦略的利用を研究している。

本書序章において、シッパーズ氏はギヤスケルの作品の思想の中心となる18世紀非国教会派理性論者たちの「市民の義務」についての概念を説明する。リチャード・プライスの『祖国愛についての説教』(1790)では国民一人一人が世界共同体の一員としての「市民」(citizen)であり、その意味をフランス革命後に出現した「市民」とは区別し定義している。18世紀の理性論者たちが設立した青少年教育機関ウォリントン・アカデミーでは「市民の義務」についての講座

もあったが、シッパーズ氏は非国教会の教徒はその著作や啓蒙活動で、市民が「自由」を享受できるよう努める役割があるという自覚があったと述べる。また氏によれば、プライスと同じ非国教会派のジョゼフ・プリーストリーは、市民は日常の事象の因果関係を把握することで判断力が養われ、また歴史を学べばそこに一定の規則性を見出せると主張し、彼の同胞バーボルドは、『市民への説教』（1792）で神の下の人類の国家の市民としての平等と同時に宗教上の平等を説き、それを脅かす政府や国家の罪を許してはならないと説いた。

本書第一章では、1838年から1849年までギヤスケルがハウイト夫妻の下で、彼らの奴隷問題のみならず、社会問題全般に対する革新的な思想に感化され、『ハウイツ・ジャーナル』誌（以下『ハウイツ』誌）や『サーティンズ・ユニオン・マガジン』誌に寄稿したことが晩年に至るまで読者の、市民としての自覚を育てるという大義となったこと、また、夫妻のもとでヨーロッパの情報を知り作品に役立てたことが指摘される。

シッパーズ氏曰く1848年に発行された平等な社会の推進を試みるF・D・モリスの論文や、ギヤスケルにとっての「ヒーロー」であったチャールズ・キングスリーのパンフレットが出回ったこと、封建主義の遺物である長子相続がフランス革命後フランスでは廃止されたことは、ギヤスケルが『ハウイツ』誌に寄稿した「クロプトン・ホール」やその後の「モートン・ホール」、「クローリー城」の背景ともなった。また、ギヤスケルが英国での平等社会実現のために、定期刊行誌を通じての教育を考えたこと示唆する。

ハウイト夫妻の思想のもと、ギヤスケルは神への使命や義務を思い起こし、平和的な手段で社会を変革しようと試みた。その例が「クリスマス——嵐のち晴れ」の執筆であり、社会の平等を推進するため、意見の相違を乗り越えて調和して生きていく共同体を示すという民主主義の根本を描いているとシッパーズ氏は主張する。またハウイト夫妻とその仲間であるマーガレット・ギリスらの、女性が共同で生活を向上させることができるという思想が、ギヤスケルの「リビー・マーシュの三つの祭日」でのエリザベスとマーガレットが女性同士の共同生活を行う、という結末にも表れているとする。

第二章は、1850年以降1856年までに『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載した作品に注目し、ギヤスケルがディケンズ、シャーロット・ブロンテやナイチン

ゲール一家との交流により中流階級の未婚女性の社会問題を、家父長制の弊害と関連させながら、革新的な視点で浮き彫りにしたことを論じている。シッパーズ氏は1851年の作品に注目し、ギヤスケルが「克蘭フォードの私たちの社交界」で、キャロライン・P・フーバーの、家父長制の障害と成り得る社会の思想の底流を提示したという論を発展させている。後の『克蘭フォード』でギヤスケルは家父長制社会において周縁に追いやられた女性たちを同じテーマで描く一方、「貧しきクレア修道女」はディケンズの助言とブロンテの創作力に感化され、市民としての行動や義務についての考察を深めたとする。

この時期ディケンズのギヤスケルに与えた文学的影響は大きく、ギヤスケルもディケンズ同様に英国の過去を顧み、悪しき点を正そうとしたとシッパーズ氏は説く。ハウイト夫妻の下での修行時代同様に、過去の誤りを明るみにし、改革しようとする精神が更に色濃く反映されているとする。例えば非嫡出子の不法な扱いが「リジー・リー」や『ルース』で描かれたが、その他にも『ルース』では、後の『ラドロー卿夫人』同様、中流階級の知的な女性が男性同様職業につき、自立していくことについて描かれ、50年代のハウイト夫妻らとの交流により得た平等精神が底流にあったとする。更に、「ジョン・ミドルトンの心」はキリスト教徒としての使命を忠実に描き、あらゆる人への差別をなくし、差別を犯した罪の赦しをも描くものであった。ユニテリアンは教義上では原罪の考えは否定するものの、シッパーズ氏は、ギヤスケルが描く社会は、「赦し」を重視した社会であるとするとする。

更に『克蘭フォード』と反して、「モートン・ホール」では教育の不十分な女性が陥る社会での孤独を描き、学校で教育を受けたコーディリアの幸福な結末と、信頼できない語り手ビディーの教養のなさを指摘しつつ、ギヤスケルは教育が女性の社会的地位の向上のために必要なこと、また英国社会に蔓延する偏見や迷信を、教育をもって取り除こうとした。シッパーズ氏はギヤスケル自身ディケンズ、あるいは理性論者たちが主張したように、社会を正すことが「市民の義務」であると自覚していたと強調する。

第三章では1853年から1856年の作品を扱い、ギヤスケルが前述の「市民の義務」という概念を、フランスのモール夫人、フランソワ・ギゾー、ヴィクトル・クーザン、アレクシ・ド・トックビルらのヨーロッパの思想を吸収しつつ更に発

展させたことを論じている。当時、英国での宗教への偏見は激しく、折しもギヤスケルが尊敬していたキリスト教社会主義者フレデリック・デニソン・モーリスが、キングズ・カレッジの教授職を追われるという事件があった。シッパーズ氏によれば、モーリスの「市民権」と「世界主義」(Cosmopolitanism)に関する思想のギヤスケルへの影響は大きく、とりわけ『北と南』で扱われた宗教上の差別とモーリスの事件とは連動していると主張する。

ギヤスケルの短編やノンフィクションなどの作品と時代背景との関連性はこの他にも見られる。例えばギヤスケルがフランスを訪れた1854年1月、マケドニアでギリシャ正教会徒によるオスマン帝国への反政府暴動が勃発し、その後ギリシャ人は英国等の支援を受け独立した。この事件を発端にモール夫人がギヤスケルにクロード・シャルル・フォーリエルの『現代ギリシャ民謡』を読むよう勧めたが、それを機にギヤスケルの「現代ギリシャ民謡」が『ハウスホルド・ワーズ』誌に掲載されたこととシッパーズ氏は推察している。これにはオスマン・トルコのキリスト教者を援護する目的があったといえる。ギヤスケルは、宗教的あるいは人種的少数派を救うには時に他国の干渉も容認すべきであると考えていた。シッパーズ氏はギヤスケルの「現代ギリシャ民謡」のギリシャ人への擁護と、バーボルトがその詩「コルシカ」でジェノヴァ共和国統治下のコルシカ人の独立を願ったこととの共通性を指摘する。

更に、ギヤスケルは宗教への偏見を扱う「ユグノーの特性と物語」で、ユグノーの思慮深く、拷問の歴史を経ても精神性や愛情に溢れた特性を讃えているが、シッパーズ氏は、序章でも述べたように、ギヤスケルのユグノーの扱いは、バーボルトの思想を継承しているとする。バーボルトは『審査法・地方自治体法反対者への請願』(1790)において、英国の子供たちがキリスト教徒という枠を超え、世界を構成する一市民としての良心を求めるべきである、と主張している。「ユグノーの特性と物語」は海を越え『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』誌で海賊版が編集されて掲載されたが、この作品を通してキリスト者に対して、生きる上での心構えがユグノーの末裔も含むアメリカ人に向けて広く発信されたこととシッパーズ氏は論じる。

信仰と個人の良心の自由の問題は『北と南』にも引き継がれる。マーガレットの父ヘイルが牧師職を辞し北に移り住んでも、宗派を問わず信仰を深めること

が一番重要であり、イギリス人としてではなく世界市民としてのアイデンティティーが大切であったとシッパーズ氏は考察する。

第四章では、1858年から1860年のギヤスケルの作品が論じられ、ギヤスケルがニューイングランドの作家たちとの関わりを通して、非国教会派として過去の歴史を踏まえつつ、アメリカの公民権運動への関心を深めた点が考察される。この時期のギヤスケルの作品は、前述のプライスの『祖国愛についての説教』やバーボルドの『市民への説教』で重要視された、国家、政治や宗教を超越した市民の究極の目的とされる、キリストの説いた隣人愛や万人への慈善について描かれた作品が多い。

シッパーズ氏によれば、『ラドロー卿夫人』では、理想のリーダー像が追求されている。ラドロー卿夫人が教育を行うことは社会的なリーダーとして独自の「良心」に従うことであり、市民としての責任を果たすこととなるという非国教会の教義に根付いたメッセージが読み取れる。この作品は、民主主義的な社会への改善を求め、長子相続に基づく社会階層性を批判しており、英国のリーダーたちが社会情勢を鑑み改革することを促していると言える。ラドロー卿夫人の教育に対する偏見の批判と同時にフランス革命のもたらした残忍さも描かれ、フランス革命の暴徒にも理性を応用する能力が必要であったと、理性論者的な視点を示した作品であるとシッパーズ氏は評す。

この後ギヤスケルの非国教会派の歴史を回顧する姿勢は「魔女ロイス」の1690年代のニューイングランドで、ピューリタンたちが何故殺し合いに至ったのかを英国人の目を通して物語ることに繋がったと氏は指摘する。「魔女ロイス」は英国のユニテリアンが清教徒を神格化せず、個人で正しい判断をするようコットン・マザーの例を通し警鐘している。「やっとならぬ調子」は『アトランティック・マンスリー』誌や『クリスチャン・イグザミナー』誌が当作品の宣伝したことを挙げ、この作品が米英両国民の市民教育の一端を担ったとする。また、「本当なら奇妙」の英国人のフランスでの祖先探しと、ギヤスケルの非国教会派の伝統的精神の探求とが重ね合わされるものの、伝統的な階級や制度に縛られる非現実性を描いているとする。

ギヤスケルのアメリカのユニテリアンとの関連においては、ニューイングランドのユニテリアン、マリア・スザンナ・カミンズの小説『メイベル・ヴォーン』

(1857) の編集に携った事がこの時期の作品の執筆動機となったとシッパーズ氏は述べる。氏は『メイベル・ヴォーン』のギヤスケルの『北と南』との構造的な類似点を指摘しながら、カミンズの描く、社会・宗教的にも優れたリーダー像はギヤスケルにも影響を与えたと推察する。『メイベル・ヴォーン』の序文でギヤスケルが述べるように、小説の大陸間での交流が英国人の平等な社会への共感を呼び起こすことを望んでいるとする。

第五章では『シルビアの恋人たち』など 1863 年のギヤスケルの作品を通してアメリカの奴隷解放宣言と南北戦争の余波によるマンチェスターでの綿花飢饉に直面した彼女の「市民」育成のための意識の高まりを論じている。

評論「まがいもの」が寄稿された『フレイザーズ・マガジン』誌は知的階層向けであったが、シッパーズ氏によれば、この作品や短篇「クランフォードの鳥籠」はバーボルドが 1804 年にジョゼフ・アディソンとリチャード・スティールの随筆集を編集した事が下地となっている。バーボルドがアディソンらの作品を通して社会に市民としての自覚を持つように説いたように、ギヤスケルも女性の自由を奪うクリノリンを着用するフランス上流階級の革命前のファッションを揶揄し、着飾らず流行を追わない市民を育成している。サムエル・スマイルズの『自助論』が求めた自己の成功よりも自己啓蒙や自助精神が市民としての責任を果たすため重要であることは、『従妹フィリス』においても明らかであるとする。

更に、シッパーズ氏は「ロバート・グールド・ショー」にふれ、ピューリタンの精神あふれるショーがギヤスケルを魅了したのは良心を持って南部の戦線に立ち、「義務」の下に亡くなったからであり、そのため訃報の形式で読む読者に不正に立ち向かい全世界の人々の自由な状態への行動を呼びかけていると解釈する。

結論においてシッパーズ氏も述べるように、本書はユニテリアン理性論者たちの思想を背景に、作品を楽しみながらも、良き市民形成のための「教え」を強調できる短篇を中心に、作品や掲載した定期刊行物の購読者、歴史的事象との結びつきなどを包括的に論じており、大変示唆に富んでいる。他方、18 世紀理性論者の中でもプライスやプリーストリーまたバーボルドらの主張はスコットランド啓蒙哲学の継承の程度などそれぞれ異なる事、バーボルドが 50 巻に及ぶ英国小説集の編集と考察を行った事も含めて論じられると、ギヤスケルの作品の特徴の

議論に深みが増すと思われる。尚、本書では本学会会員矢次綾氏の著作の引用や、冒頭で閑田朋子氏への謝辞があり、本学会会員の世界的な活躍を垣間見ることができた。

(聖心女子大学非常勤講師)

『ギヤスケル論集』編集委員
閑田 朋子、木村 晶子、松岡 光治、玉井 史絵、矢次 綾

編 集 後 記

『ギヤスケル論集』第29号をお届けします。今号は、2019年1月31日に逝去されたギヤスケル協会設立者、山脇百合子先生追悼号です。協会歴代会長と大野龍浩先生に追悼文を書いていただきました。大野先生は、山脇先生のお写真も提供してくださいました。ありがとうございます。編集委員も、山脇先生のご冥福をお祈りすると共に、先生の協会へのご尽力に心から感謝の意を表します。◆第30回例会でのご講演を論文として寄稿して下さった白井義昭先生に感謝いたします。◆投稿論文は2本で、2本ともが審査を経て掲載されました。なお、投稿者の1人が矢次であったため、査読依頼や結果の受理等々の本来であれば編集長の矢次が行うべき業務を、木村正子事務局長が快く代行してくださいました。この場をお借りして、お礼申し上げます。掲載順は、慣例に従い、執筆者の姓のアルファベット順です。次号以降も多くの投稿があることを願います。最新の投稿規定については、日本ギヤスケル協会のホームページ (<http://www.gaskell.jp/tokokitei.pdf>) をご覧ください。投稿用テンプレート (<http://www.gaskell.jp/ronshu.html?#template>) もどうぞご利用くださいませ。◆書評は新刊書2点に関するものです。書評者の先生方、ありがとうございます。『論集』では、ギヤスケルに関連する新刊書をできるだけ書評に取り上げます。希望の書籍がありましたら、編集委員会までご一報くださいませ。(矢次)

ギヤスケル論集第 29 号

2019 年 9 月 20 日 印刷

2019 年 10 月 5 日 発行

発行者 木村 晶子

編集者 『ギヤスケル論集』編集委員会

発行所 日本ギヤスケル協会

〒 501-6295

岐阜県羽島市江吉良町 3047-1

岐阜県立看護大学

木村正子研究室内

mkimura@gifu-cn.ac.jp

印刷所 大阪教育図書株式会社

〒 530-0055

大阪市北区野崎町 1-25 新大和ビル 3F

TEL.06-6361-5936 FAX.06-6361-5819